

古浄瑠璃《こそでうり》から河東節《小袖模様》へ

— 詞章の地域差 〈シツパリ〉と 〈ジューワリ〉 など —

坂本清恵

江戸音曲と言われてきた河東節の正本に上方アクセントの影響がみられるのはどうしてなのか^①。河東節『十寸見要集』所収の《小袖模様》は半太夫節から河東節に取り込まれた曲であるが、明治三十六年に半太夫節として五線譜に採録されており、昭和八年に『世界音楽全集』に収められている。この曲が古浄瑠璃の詞章を摂り込んだものであったことが、その節付けに反映しているのである^②か。

節事《小袖模様》は古浄瑠璃では《こそでうり》として寛文頃からの演奏記録がみられる。寛文年間に「小袖模様雛形」の刊行が始まったことを思うと、小袖のファッションカタログの内容を綴った詞章が、空前のヒット曲になったと考えられる。《小袖模様》は、古浄瑠璃から詞章を摂り込んだものであるが、江戸時代の当流浄瑠璃である義太夫節にも摂り込まれている。当時の諸流の太夫がこぞって語り、唄ったことが現存の正本などから窺える。さらには、享保十九（一七三四）年の春の中村座の『十八公今様そが』では「小袖もやうのせりふ」に、この詞章が使われている^③。

本稿では、浄瑠璃の節付けはそれぞれの太夫により新たに作曲がなさ

れたが、詞章ほどの程度の異同があるのかに着目し、比較検討を行う。ひいては、どのような詞章を半太夫節、河東節が受け継いだのかを明らかにすることにより、上方アクセントの影響についての参考としたい。

一、《こそでうり》《小袖模様》などの諸本

半太夫節、河東節の《小袖模様》は古浄瑠璃の節事部分を利用したもので、節付けと詞章の改変がみられる。先行浄瑠璃の詞章をどのように摂り入れたのかを明らかにするため、ほぼ同様の詞章を持つ以下の十八種類について比較を行う。本文に半太夫・河東節にない詞章が加わる長唄については成立が延享年間といわれるが、録音資料のみを扱う。二での引用にあたっては、①～⑮までの略称を「」で示す。同じ太夫の節付けの場合、段物中の節事であればA、節事のみの場合にはFとした。詞章の異同については、稿末に掲げた。節事の丁数を示した。

① 「第三 みちゆき付りこそでうりの事」『和国びじん哥譚并こそでうり』

愛知県立大学図書館蔵（貴9117-25）「出羽掾A」五段 絵入り 十七

行二丁半（十九行） 節付けはあるが胡麻章はなし

（参考）『古浄瑠璃正本集 第八』一九八〇年 角川書店

慶応大学図書館所蔵「和国びじん哥諍并二小袖うり」（110X-198-1）
十八行半丁（十五行）

②「松よのひめ付タリこそうり」『道行揃』東京都立中央図書館蔵（東5661.2）[出羽掾^F]

天和三亥年十二月吉日 本屋九兵衛開板 絵入り十五行一丁
（二十三行） 節付けあり、胡麻章は前半にわずかにある

③「松世の姫道行」**小袖うり**「こそうり」大阪大学附属図書館 笹野文庫（笹野143）「土佐掾」八文字屋八左衛門板 五段 十行二丁
節付け、胡麻章あり

（参考）『古浄瑠璃正本集角太夫編 第三』一九九四年 大学堂書店

『古浄瑠璃集 角太夫（一）』一九六一年 古典文庫

国会図書館蔵本「いそびうり」（338337）山本九兵衛版 十行

大英図書館蔵本「いそびうり」山本九兵衛版

<https://kokushonij.ac.jp/biblio/100415169/manifes>

④「いそびうり」『紫竹集追加 九』天理大学附属天理図書館蔵（9117イ177）[加賀掾]

二條通寺町西へ入町 山本九兵衛刊 八行二丁 節付け、胡麻章あり

（参考）『加賀掾段物集（附、宇治加賀掾年譜）』一九五八年 古典文庫

⑤「小袖賣もやうつくし」『豊後節古正本集』東京大学黒木文庫（黒4133-0001-002）[豊後節]

七行二丁 「宮古路豊後」節付け、胡麻章あり

（参考）「小袖賣もやうつくし」早稲田大学演劇博物館蔵本（ト14552）

⑥「小袖うり」『結城合戦』阪口弘之氏蔵「結城」

十一行二丁

『奥浄瑠璃集「続」翻刻と解題と論考』（二〇二二年 和泉書院）に掲載の翻刻による。

⑦「道行」『和国美人歌諍 知略遊女』阪口弘之氏蔵「知略」

六段か、九行二丁半 ⑥と同書に掲載の翻刻による。

⑧「まつよの姫」東京大学霞亭文庫（E22-776:738）江戸板 元禄頃 [江戸板]

大傳馬三丁目 丸屋新板 巻頭欠丁 六段 十七行半丁（十四行） 節

付け、胡麻章なし

⑨『金山左衛門岩屋城 大和廿四孝』「土佐少掾A」

元禄七年戊正月吉日 大傳馬貳丁目 木下甚右衛門板 六段 十七行

半丁（十四行） 節付け胡麻章なし

鳥居フミ子「金山左衛門岩屋城 大和廿四孝」とその脚色法『東京

女子大学日本文学』五四 一九八〇年の翻刻、および鳥居フミ子編『鳥

居文庫浄瑠璃稀本集 第一集』一九九六年の影印による。

⑩「染小袖もやうの段」『蘭曲後撰集 二』土佐少掾 都立中央図書館蔵（『蘭

曲大竹集 二』加賀文庫（58352）後題箋）「土佐少掾F」

【六十四】やまと廿四孝道行 【六十五】小そでもやうのだん 九行

二丁 節付け、胡麻章あり 江戸 木下甚右衛門

（参考）「元禄版 浄るり道行づくし」国文学研究資料館蔵本（29187）

「土佐節段物集」早稲田大学演劇博物館蔵本（1188）

「染小袖もやうの段」大阪府立図書館「蘭曲集3」（甲和/04）

大伝馬町三丁目 鱗形屋三左衛門板

⑪「小袖模様」『鳩鳥』国立国会図書館蔵本（京-416）享保四（一七一九）年三月刊「鳩鳥」

外題「仁本鳥 乾」「爾保鳥 坤」載文章・群奇堂

半太夫・初代河東 九行横本二丁半 節付けほぼなし、胡麻章なし

(参考) 国立音楽大学竹内文庫 (02-1002)

⑫「小袖もやふの段」小松屋板 国立国会図書館蔵本 (229-227) 享保二

(一七二七)年(九(一七二四)年)ろ 「小松屋」

九行二丁 節付け、胡麻章あり

(参考) 小松屋版 東京国立博物館 (229-227)・小松屋版 抱谷文庫

本 国文学研究資料館紙焼きにて確認 (ホ31-51)

小松屋版『河東節』国立国会図書館 (本別352)

⑬「小袖模様の段」「十寸見要集」初板 宝暦九(一七五九)年以降 国

立音楽大学竹内文庫 (02-1007) 「十寸見」

武江浅草御地内伊勢屋吉十郎板 六行三丁 節付け、胡麻章あり

⑭「小袖もやふの段」井筒屋板 国立音楽大学竹内文庫 (02-2001-008)

010) 「井筒屋」

八行二丁半 節付け、胡麻章あり

⑮「小袖もやふの段」いがや板 国立音楽大学竹内文庫 (017-011-039)

022) 「いがや」

八行二丁 節付け、胡麻章あり

⑯「小袖もやふの段」糸竹哥みどり」国立国会図書館(寄特5101)「大

坂板」

「大坂心齋橋筋瓦町」出版元破れ 十二行二丁半 横本 式亭三馬旧

蔵本 節付け、胡麻章あり

⑰「半太夫節小袖模様」世界音楽全集」第十八巻 春秋社 昭和六年「世

界」

田中正平博士邦楽研究室で明治三十六年採譜 山彦秀治郎演奏五線譜

⑱「大薩摩外記節 小袖模様」作者年代不詳「長唄」

唄・日吉小三八(初世)、三味線・杵屋栄二、稀音家六多郎の演奏

日吉小三八師音源より 日吉栄寿採譜 二〇一三年十一月

「稿末【表1】には刊行年のわかる正本と『松平大和守日記』『鸚鵡籠中記』などで演奏記録がみられるものを表にした。多くの太夫がこの節事を語り、唄ったことがわかる。

ほぼ同じ詞章の節事を、おおむね上方の古浄瑠璃では《こそでうり》、半太夫節、河東節では《小袖模様》としている。この節事の詞章については、寛文年間に上方で刊行された伊藤出羽掾の①『和国びじん哥諍并こそでうり』が現在確認される中では古い。阪口弘之氏によると、⑧の江戸板の東京大学霞亭文庫に残る太田南畝筆の後題箋『まつよの姫』が元禄頃の刊行であるものの、内容的には、上方板が不用意な刈り込みを行った個所がみられ、江戸板⑧、上方板①の両板に共通の正本が存在したと考えられるが、結城合戦に材を得た作品で舞台が東国であることから、江戸に古い正本が存在し、それを出羽掾が移入したとみるのが妥当であるという^⑤。また、⑧は阪口氏^⑥所蔵本の⑦『和国美人哥諍 知略遊女』と近いという。当時は、題名に「知略」のつく浄瑠璃が多くみられる。

①の『和国びじん哥諍并こそでうり』「第三段 みちゆき付りこそでうりの事」までのあらずじを示す。

結城七郎の娘まつよの姫が、鎌倉將軍の御台所のお召しにより、和歌を詠み、柴田の息女柏の前に玉津島明神の庇護の元に打ち勝つが、それにより、柴田の会津から鎌倉に向けての拳兵へとなる。七郎は会津攻めをしたが、柴田に捕らえられてしまい、父を救うために会津に道行した

松世の姫が、遊女になりすますため、菱屋で小袖を求める。菱屋の亭主はまず、朝顔の咲き乱れた模様を示すと、明日も知らぬ夢のようで味気ないという。次に、梢を伝う猿猴が月をうかがう染小袖を見せると、望んでも叶わない様子であるという。さらに、亭主の勧める満々たるわだつみの波がどうと打ったそのあとに磯べに遊ぶ群鳥たちがさわく染模様についても、水は泡と消え、千鳥は騒々しいという。そのあとを引用すると、「ていしゆおどろき、扱々、むつかしき上らうかな、おほくのこそでをうりけれども、これほどむつかしい人はいまだみず、さ程物ごのみし給は、のぞみのま、にかき付、きやうとへのぼせ給へ、去ながら、ひしやかたなには、こそではなきかといはれんも、口をしや、蔵の内なるこそで、みなく、取出し、御めにかけん、のぞみ給へ、さりながら、小袖一つめされんに、ことごとく取出さんもよしなし、あらく、もやう申へし、其内に望のあらば、取出し、参らせん、きこしめされよと、いちく、次第にかたりけり」とあり、この後に、節事での小袖の模様の説明となる。

小袖の雛形は手元になく、菱屋の主人が、小袖の模様を語るその部分のみが、古浄瑠璃では《こそでうり》として演奏されている。①は寛文年間の正本といわれるが、小袖模様の雛形が刊行されるのが寛文六、七年であるとする、模様を描いて発注する様子が、ここには描かれていることなるか。正本のタイトルも『和国びじん哥諍并こそでうり』とあるように、「こそでうり」が重要であることを示している。

古浄瑠璃では巻物屋「菱屋」の主人は「一時ばかり」模様について説明、半太夫節では「半時ばかり」に変更されるが、長々と説明はしたものの、古浄瑠璃で松世の姫が選ぶのは語りだしの最初の「武蔵野に一むら薄、ほに出でてみだれあふたるこそで」であり、再び父に「合う」こ

とができると、この小袖を選ぶ。和歌に秀でた姫らしい選択である。

阪口氏による指摘のとおり、この古浄瑠璃の《こそでうり》の詞章は、江戸時代の当流浄瑠璃である義太夫節にも取り入れられている。紀海音のお染久松の『袂の白しほり』では、お染が嫁入り衣装の小袖を「三井」で選ぶシーンで、お染が決めかねていると「扱むつかしい客人かなさ程物ずき有ならばひながたかいてあとよりもお目にかけん、去ながら、三井が棚に小袖はなきといはれんも口おし、くらの内成る染模様あらあらかたり申さんと。そばに成帳面引きよせて一々にこそよみたてけれ」と小袖の模様を語り出す。省略はあるが、《こそでうり》の詞章を一部入れ込んでいる。また、お染が選んだものも松世の姫と同じ「むさしのに一村。ず、すき穂に出て」の模様で、趣向もそのまま取り入れている。

近松の『傾城吉岡染』「紙子ひひなかた」にも《こそでうり》の詞章が処々に取り込まれている。詞章の異同からは、海音、近松ともに土佐掾（角太夫節）の正本から取り入れたとみられる。

①から④までと⑥には、節事に《こそでうり》とあるが、⑦⑧⑨には節事の題名が明記されていない。⑤の宮古路豊後掾の節事では「小袖売もやうつくし」と「小袖売」を残したまま「模様尽くし」を足したタイトルである。

「柳亭浄瑠璃本目録」文化三年柳亭種彦・文政元年蜀山人写、東京都立中央図書館、加賀文庫（768/WR/8）には、「山本角太夫」の項に、

●小袖うり

此浄瑠璃は結城七郎 小袖賣と申て宇治加賀掾もかたれり 江戸半太夫もかたりしにより今も江戸節又河東節にてかたる 小袖もやうというは此うちの節事也

とある。角太夫（土佐掾）は、節事も《こそでうり》ではあるが、浄瑠

璃全体を『和国びじん哥諍』から『こそでうり』に変更している。『こそでうり』の中の節事の《こそでうり》が③である。

⑦⑧⑨⑩については、阪口氏、阿部氏、鳥居氏のご研究による。⑦⑧は写本で、⑨⑩は江戸での出版である。

⑨は、阪口氏によると『金山左衛門岩屋城』（刊年所属不明、鱗形屋板）の改作『金山左衛門岩屋城大和廿四孝』の四段めに①の三段めと同様の場面を増補したものという。『袂の白しほり』以上に、「菱屋」でのやりとりを含め節事の前後の趣向が併せて摂り込まれている。土佐少掾は半太夫とほぼ同時期の出版となり、「半太夫らの盛んなかたり」といい、嵌め込み形式の増補ぶりといい、この節事の江戸での人気の程が窺える^⑨のとおりである。『松平大和守日記』によれば、元禄七年三月十一日に人形うき世茶屋で土佐少掾の門下の式部（広瀬式部太夫）が《染小袖もよう》を語っている。⑩は節事のみで目録には《小そでもようのだん》とあるが、本文内題では《染小袖もやうの段》とある。⑩から「染」が取れたものが半太夫節、河東節の《小袖模様》である。同じ元禄七年四月九日に半太夫・初太夫が碁盤人形で《小袖のもよう》を語っている。

⑪『鴉鳥』以降は節事のみ《小袖模様》で、⑪は半太夫と初世河東によるものである。⑫は河東節正本の出版を行う小松屋板による初世河東の薄物正本である。⑬は、四世河東が新たに六行本に改めて出版した『十寸見要集』に所載の「小袖模様の段」である。⑭は井筒屋、⑮は、いがやによる薄物正本である。⑯の『糸竹歌みどり』は半太夫節として所収された大坂板「小袖もやふの段」である。⑰は五線譜、⑱は音源からの採譜によるもので、もっとも新しい詞章である。

浄瑠璃の一部分としての節事《こそでうり》であったものが、当時流行のファッション誌ともいえる小袖雛形本が出版され、小袖の模様雛形が

大評判になった。その流行に乗って、江戸では小袖の模様を網羅的に取り上げる節事《小袖模様》が大ヒットした。上方でも、江戸でも大流行した曲であるといえる。土佐少掾（土佐節）の《染小袖もよふ》は段物でも語られたが、《小袖模様》は独立した節事としての名称としてふさわしい改変であった。

二、詞章の相違

古浄瑠璃の節事《こそでうり》の詞章を、半太夫節、河東節の《小袖模様》とするにあたり、どのように詞章を摂り込んだのであろうか。⑧のように節付けがない読み本もあり、節付けが古浄瑠璃と半太夫節・河東節では大きく異なるが、ここでは詞章の相違について分析を行う。諸本を比べてみると、詞章の相違は次の三点に分類できると思われる。

I. いわゆる古浄瑠璃とは異なる独自性を出した語句

II. 上方と、江戸を含めた東国ことばとの相違による語句

III. 半太夫と初世河東のみの独自の語句

Iは、江戸と上方と共通の祖本がある、あるいは江戸のものを上方が摂り入れたと考えられているが、古浄瑠璃から改めた語句がみられる。IIはその改変のうち的地域なことばの違いに関わる可能性が認められるものである。

IIIについては半太夫と初世河東の『鴉鳥』と、初世河東の小松屋出版の薄物のみに見られる語句である。小松屋板の表紙に、次の文言を載せ、小松屋が河東の正式な正本屋であることを示している^⑩。

河東直傳之正本は小松やならで外に無之候所二此ころるいはん相みへ申候 河東正めいの本には如此の判形ヲ致令板行有也 能々御吟

味被成御求可被下候

すなわち、小松屋板のみが他の出版元とは異なる詞章を持っているといえる。半太夫節としても、江戸板と上方板では詞章が異なるものもあり、それぞれの出版の事情があったと考えられる。

以下、異同について歌詞を最初から確認する。用例には『鳩鳥』の詞章を用い、異同箇所傍線を引く。

1 「一むら薄ほに出てみたれあひたる。小袖もあり。」『鳩鳥』

古浄瑠璃①～⑩までではすべて「あふたる」とハ行動詞のウ音便形であり、河東節の⑭「井筒屋」、⑮「いがや」、⑯「大坂板」と⑰「長唄」も同様である。半太夫節、河東節の⑪「鳩鳥」、⑫「小松屋」、⑬「十寸見」が「あひたる」、⑱「世界」が「あいたる」で非音便形である。半太夫節、河東節では、Iの古浄瑠璃とは異なることを示すために、「あひたる」に変更したと考えられよう。ハ行動詞のウ音便形は上方のものであり、それを江戸に合わせて変更したのであろう。

2 「おなじいろ香にさく染か」『鳩鳥』

「さくそめか」と「さきそむる」の大きく二通りに分類できる。まず、「さくそめか」は、①②「出羽掾A F」、⑦「知略」、⑧「江戸板」、⑩「土佐少掾F」、⑪「鳩鳥」、⑫「小松屋」である。「咲く染香」であろうか、「色香」に韻を踏んだ形で「そめか」としたのであろう。

分かりにくいためか、③「土佐掾」、④「加賀掾」、⑤「豊後節」は「さきそむる」である。⑥「結城」も同様であろう。「さきそめり」が、⑨「土佐少掾A」、⑬「十寸見」、⑮「いがや」、⑰「世界」で、「さきそめる」が⑭「井筒屋」、⑯「大坂板」である。⑰「長唄」のみ「さきそめて」

である。

3 「き、やうかるかやわれもこう」『鳩鳥』

「われもこう」はⅢの例で、⑪「鳩鳥」⑫「小松屋」のみである。

「桔梗、刈萱、吾亦紅」としたのが、半太夫と初世河東による⑪「鳩鳥」で、初世河東の正本を出版した⑫の小松屋板が薄物でもそれを採用し、独自性を示したものと考えられるという。^⑬

四世河東が新たに六行に改めた⑬「十寸見」では、古浄瑠璃同様の「桔梗、刈萱、女郎花」に戻っていて、小松屋以外の⑭「井筒屋」、⑮「いがや」の正本も同様である。

近世では「桔梗、刈萱、女郎花」が一般的であるが、謡《大江山》では「桔梗、刈萱、吾亦紅」の組み合わせが使われている。独自性を出すのにあまり例のない「われもこう」が使われたとみられる。享保十九（一七三四）年の春、中村座の『十八公今様そが』における「小袖もやうのせりふ」においては小松屋板と同じ「桔梗刈萱われもかう」である。^⑭ 初世河東の詞章を取り入れたのである。

4 「不二と。三保とをそめわけて。すそのは田子のうらなれや」『鳩鳥』

「そめわけて」①②⑪⑫⑬⑱と「そめわけに」③～⑩⑭⑮⑯の異同がある。

「すそは」は①～④⑥⑦⑧までと⑯の半太夫節「大坂板」、「すそのは」は、⑨⑩「土佐少掾A F」、⑪「鳩鳥」ほか、⑫～⑮⑰の半太夫・河東節の正本であり、Iの例とできるか。古浄瑠璃と変えたとみられる。着物の裾ではあるが、富士の裾野を掛けて「すその」に変更したのであろう。^⑱ 「長唄」は「もすそ」になっている。

5 「枝もたは、にしうわりと。つもれるかけに白鷺の。」『鳩鳥』

I に当たる例で、「たわむや」が①⑥「結城」まで、「たは、に」⑦「知略」⑧「長唄」への変更がみられる。

II に当たるのがオノマトペ「しうわり」への変更である。柳の枝に雪が積り、撓む様子を表したものである。②「出羽掾F」出羽掾の道行揃と⑬の半太夫節「大坂板」が「しいわり」、①③④⑧⑩までの古浄瑠璃が「しつぱり」、⑪「鳩鳥」から、⑬「大坂板」を除く⑮「長唄」までが「しうわり」である。

「しいわり」は、『日本国語大辞典』第二版 (Japan knowledge) (以下、『日国』とする) に以下の用例がみられる。

たわみ曲がるさまを表わす語。ひいわり。

*浄瑠璃・悦賀楽平太(1692頃)役目尽し「とびらは弓をはるごとく、しいはりしいはりとはむ所を、エエイウンと押しければ」

*浄瑠璃・撰津国長柄人柱(1727)五「面(おもて)を作る品作る、一荷の芦をゆつすりと、肩も枒(おうこ)もしあわりと、目通り近くどかっと卸(おろ)し」

前者が近松存疑作竹本座の第二段、後者が並木宗輔・安田蛙文作京方太夫座で、いずれも義太夫節の例である。「しいわり」は弓や枒の撓む様を示した上方での使用例としてよい。

古浄瑠璃で使用された「しつぱり」は〈シツパリ〉であるが、①「出羽掾A」は「しつぱり」とある。①の正本には、「又」の強調調形〈マツタ〉に対しては「まつだ」の表記がみられ、濁点が促音とのかかわりで振られているようである。

「しつぱり」は『日国』には、次のようにある。

(1) 強く身にこたえるさま、深く身にしみるさまを表わす語。

*志不可起(1727)「しつぱり物のつよきに云。執の字か」

*咄本・くだ巻(1777)生醉「わしらはおぶった斗で酔ました。チトしつぱりと異見なさい」

*滑稽本・浮世風呂(1809)13三・下「ヲヲ、あつツツツ。しつぱりだ、しつぱりだ」ト、いひながらかきまはす

(2) 木の枝などがたわむさま、また、その音を表わす語。しつぱ。

*かた言(1650)五「木の枝などのたはむ音をしつぱりと云」

*俳諧・けふの昔(1699)「しつぱりと師走の梅の咲て居る(若芝)」

*浄瑠璃・傾城吉岡染(1710頃)紙子雛形「柳に雪降りて、枝もたはむやしつぱりと、積もれるかげに」

また、『角川古語大辞典』(Japan knowledge Lib)では、以下のよう
に『かた言』と『志不可起』の例を説明している。

1 物事の加減がきつすぎるさま。強く身にこたえるさま。深く身にしみるさま。『かたこと・五』に「木の枝などのたはむ音をしつぱりと云」といい、『志不可起』に「物のつよきに云」という。『俚言集覧』には、きつと物にこたえた気持のときに用いる語とし、

針先の痛み、虫に刺されたとき、恐ろしいと思う人に意見されたとき、ひどく眠いときにたばこをのんだときなどの場合を例に挙げる。

例 「お肴なくともおなじみだけに、御酒しつぱりと、いへば」

〔露休置土産・一〕

例 「次の間はしつぱりとする料理人(＝本客ニハ塩味ノ薄イ上物ノ料理ヲスルガ、次ノ間ノ客ニハ塩味ヲキカス)」〔誹風柳

多留・四

2しつかりと。

例 「口をおさへて内儀は七三に、しつはりとだきつき、耳にあて、のくどきごとに」〔好色美人角力・五〕

例 「所作は名人。しつはりと立役なされ」〔役者懐世帯・大坂〕

『日国』の(2)の『かた言』にある「木の枝などのたはむ音をしつぱりと云」が古浄瑠璃で使われた例と同じである。近松の『傾城吉岡染』の例は、注(8)に示したように『こそでうり』の詞章を撰り込んだ個所である。これに対して江戸での「しつぱり」は「強く身にこたえるさま」とあるものが主流で、『浮世風呂』には「しつぱりもの」の例として「子供衆には、チトしつぱり物でござりませう」があり、湯の温度が熱すぎるときに使用される。江戸では枝の撓むさまに「しつぱり」が使いにくい状況であったとみられる。

「しつぱり」に対して⑩「鴉鳥」以降は「しゅうわり」が使用される。(シユーワリ)あるいは(ジューワリ)と唄われたのである。これは、「しつぱり」が(シツパリ)、地域によっては(ジツパリ)の例もあるのと同様であり、またオノマトペでは重量の軽重を清濁で言い分けることもあるので、どちらも語形としてはありうる。

「しゅうわり」の例は記載辞書がないが、「じゅうわり」についてみる。

『日国』には、

ぐあいよく適合して、ゆつくりと進行するさま、少しずつ進むさまを表わす語。じわりじわり。

*談義本・無而七癖(1754) 三・鉄火坊が評の俳諧「わるい所はすてつ扁んからじうわりと割を入れて」

*狂詩・寝惚先生文集(1767) 一・太平楽「親分子分柔和理(ジ

ウワリと)、一杯強飲顔真紅」

*雑俳・柳多留拾遺(1801) 卷一八「しうわりとそちらへ尻をおうはとの」

少しずつ進むさまであるから、雪の積もった柳の枝が撓む様子を示すこともできよう。

『角川古語大辞典』には、

1 ゆつくりと順序よく事が進行するさま。じわりじわりと。

例 「しうわりとそちらへ尻をおうはとの」〔誹風柳多留拾遺・九〕
2 充分に。延享(一七四四～四八)ごろの江戸の流行語。

例 「今お江戸のはやり詞にじうわりと、いふ事有。たとへばじうわりと頼まする、じうわりと御世話下されかしの類也。此人お江戸中へじうわりと請取まして、仕内もじうわりとおもしろく、御きりやうもじうわりとつつくしく」〔延享五年逸題評判記・江戸〕

2に程度副詞のような「じうわり」が江戸の流行語として掲載されている。これは、初代尾上菊五郎の評判に使われている例である。引用の続きには、「評判もじうわりと一めんにしみ渡りましたれば。春狂言にはその五郎でもなされて。じうわりと大当りを待ますぞ」とある。1と2と両様の意味で使う流行語であったのだろう。

前田勇『江戸語大辞典』(講談社 昭和四九年)の「じゅうわり」は、助詞「と」を伴う。物をゆつくりと落ちつけるさま。また、しつくりと合うさま。明和から天明へかけての流行語。「じゅんわり」ともいう。

安永六年・さとすめ婚礼「もし大屋さんへ、じうわりとこんにや旦那婚礼に呼ばれやんす」

天明四年・教訓彙軌本紀「二合五勺（こなから）の酒に酔うては源八と闘諍（とうじやう）に及び、親分柔訣（ちうはり）と制すれば双方口をと閉ちて止（や）む」

⑬「大坂板」を所持していた式亭三馬の『狂言綺語』にも使用例がみられる。辞書により流行した時代の記述に違いがあるが、延享五年に「江戸のはやり詞」として多用されていることを思えば、流行の先駆けとなつて「じうわり」「しうわり」が江戸の半太夫節・河東節《小袖模様》に摂り込まれたとしても不思議ではない。小袖雛形本というファッション誌の流行とともに、江戸の半太夫節、河東節の《小袖模様》には、やはり詞が摂り込まれたと考えてもよいのではないだろうか。同じ半太夫節でも⑭「大坂板」は「しいわり」であることも、半太夫節、河東節については江戸での流行語の摂り込みを考えてよいだろう。

6 「肩には雲に龍をそめ」『鳩鳥』

Iの古浄瑠璃とは異なる詞章に改変した例と考えられる。古浄瑠璃では、①②の「出羽掾A・F」本、④「加賀掾」は「扱かたには龍をそめ」で、③「土佐掾」、⑤「豊後節」、⑥「結城」では「扱又かたには龍をそめ」である。「扱」「扱又」で始まるこれらのことばは、古浄瑠璃の語り口である「さてもそののち」「さるほどに」と同様の語り継ぎのことばである。「扱」「扱又」を改めて、「肩には雲に龍をそめ」と韻律も整えて、雲龍を描いている。これは、⑧から⑰までに共通する。⑱「長唄」では、「扱又」を残し、その後に文言を付け足して「扱又肩には紅の舌をかへしてのぼり龍さつとすみえの薄彩色雲を巻き立てくるくる」とし、長唄の独自性を出したのであろう。

7 「たけつて竜をにらみつけ」『鳩鳥』

①「出羽掾A」、④「加賀掾」、⑤「豊後節」、⑦「知略」、⑧「江戸板」が「にらみつけ」で、他は「にらみつけ」である。

8 「峯のまつかせ。はつと吹」『鳩鳥』

「はつと」はⅢの例で、⑪「鳩鳥」と⑫「小松屋」のみが他と異なる。風の形容であるから、「はつと」は、〈パット〉か〈パット〉と風が吹いたものと思われる。古浄瑠璃では、①②の「出羽掾A・F」「さざざつと」、④「加賀掾」が「さざざつと」、③「土佐掾」が「ざんざざつと」、⑤「豊後節」が「ざ、んざつと」である。

⑦「知略」と⑨⑩の「土佐少掾A・F」は「ざつと」、⑧「江戸板」は「さつと」である。小松屋板以外の⑬⑭⑮、⑯の「大坂板」も「さつと」であるが、〈サット〉と〈ザット〉と両方の可能性がある。

近松の『傾城吉岡染』は「ざ、んざ。さつと」で、③「土佐掾」の「ざんざざつと」と近く、⑥「結城」の「さざんざ颯と」と同様である。

9 「追欠をつつめ。引かいつかんでいわほにあかり」『鳩鳥』

「追欠をつつめ」もIの例であろう。①から④と⑥「ぼつかけく」のように「ぼつかけ」が使われ、いかにも古浄瑠璃らしい。⑤「豊後節」、⑦「知略」をはじめ、江戸、東国の正本は、半太夫、河東節と同様に「おつかけ」である。ただし⑪「鳩鳥」以降は、「おつかけ」を繰り返さない。続く「追詰め」を①②③⑦が「おいつめ」、④⑤⑧はその文言がなく、⑨⑩「土佐少掾A・F」、⑱「鳩鳥」以降は「おつつめ」に変更されている。「いわほにあかり」は、「のぼり」が①から⑩までと小松屋以外の河東節、「あがり」と変更したのが⑪「鳩鳥」、⑫「小松屋」、⑬「十寸見」、

⑰「世界」である。

10 「こすのひまよりからねこの」『鳩鳥』

①から⑧までと⑯の半太夫節「大坂板」、⑱「長唄」が「みす」で、⑨⑩「土佐少掾A F」と⑪から⑮までの半太夫節・河東節が「こす」の例である。

「みす(御簾)」と「こす(小簾)」では、『日本語歴史コーパス』では前者が二八四例、後者が三例と、圧倒的に「みす(御簾)」が使われているが、わざわざ独自性を出すために「こす」を半太夫節・河東節で使ったのであろうが、江戸の⑨⑩「土佐少掾A F」も「こす」である。Iの例とはできるが、半太夫節のうち⑯「大坂板」が上方の古浄瑠璃と同じ「みす」である。

11 「柳桜に松楓」『鳩鳥』

古浄瑠璃①②③⑥と、⑯「大坂板」が「かいで」で、江戸、東国の正本⑦から⑮⑰⑱は「かへで」とみられ、IIの例である。

「かいで」『日国』は次のとおりである。
「かえで(楓)」の変化した語。

*運歩色葉集〔1548〕「雞冠樹カイデノキ」

*天草本平家物語〔1592〕四・二「クヅ caide (カイデ) キギ

ノハシゲツテ ココロボソウ ウツノヤテゴシヲ スギユカルレバ」

*虎明本狂言・花子〔室町末〜近世初〕「まづまづさけをまいれといふてな、かいてのやうなうつくしひ手にて某が手をとっておくのまへいかるる程に」

*俳諧・毛吹草〔1638〕六「遅く散かい手に有や果報筋(政公)」

掲載された例は、いずれも江戸の例ではない。『日本語歴史コーパス』では「かいで(楓)」に『とはずかたり』の例がヒットする。この例については襲の色目の「かいて(楓)」とする説もあるが、「かいく(皆具)」(II 4ウ9)の説もある。『て』の異体字と「く」の類似からの解釈のゆれであり、『とはずかたり』には、他に「つたかへて」(IV 3ウ1)の例があることから、これは「かいで」の例ではないのである。

中世の古辞書では『撰壤集』『頓要集』にも「カイテ(鶏冠木)」の例があり、現在でも「カイデ」が兵庫県但馬、京都府丹波・丹後地方にみられる^⑮。上方で中世以降使われていた「カイデ」を、東国、江戸では「カエデ」と直したのであろう。

12 「むらさきかのこみる人の心はけしのへにかのこ。朽葉かのこも候と。」『鳩鳥』

ここでは、Iの例のうち、⑥「結城」までが「皆人」で、⑦「[知略]以降が「見る人」、⑱「長唄」のみ「はなひこ」である。「な」の変体仮名が「る」に間違われ、「みな」から「みる」になったのではないかと考えられる。

また、①から⑧までの古浄瑠璃には「朽葉かのこ」がない。「紅かのこも候と」では韻律が整えにくく、「朽葉かのこ」が付け足されたのではないか。ただし、⑨⑩「土佐少掾A F」と⑪以降の半太夫・河東のどちらが先に「朽葉かのこ」を採択したのかは分からない。

13 「ことはに花を咲せつ。」『鳩鳥』

①③から⑥、⑨⑩「土佐少掾A F」と⑱「長唄」が「さかせつ、」

②「出羽掾F」、⑦「知略」と⑧「江戸板」が「さかせ」、⑩「鳩鳥」が「咲せつ」である。⑫「小松屋」以降⑰までの河東節では「さつかせつ」、で、「咲く」を強調した歌詞である。

14 「半時はかり語しはけに面白そ聞ける」『鳩鳥』

最後の部分である。小袖の模様について語られた時間が「一時」から「半時」に代わる。「一時」が①から⑩までと⑭「井筒屋」、⑯「大坂板」で、「半時」が⑪「鳩鳥」⑫「小松屋」、⑬「十寸見」⑮「いがや」⑰「世界」⑱「長唄」である。Iの半太夫、河東節が古浄瑠璃との相違を出すために語る時間を「半時」に直し、受け継がれたのである。

「ひととき」は『日国』では、

(1) しばらくの間。ほんのわずかの間。暫時。瞬時。いつとき。が、第一義で示されているが、

(3) 昔の時間区分で、一日の十二分の一。今の約二時間。いつとき。とあるように、二時間とすれば、長い説明をしたことになる。《小袖模様》の半太夫節、長唄での現在の演奏時間は十五分程度である。「一時」から「半時」に直したほうが、実際の時間に近いということになる。

なお、半太夫、河東節以外を見た場合、④加賀掾『紫竹集』の「こそでうり」と、⑤宮古路豊後掾の「小袖賣もやうつくし」が以下のように他と異なる詞章を持つ。宮古路豊後掾は、享保十九年（一七三四）に江戸に出ていたが、④同様の上方の詞章を持っている。

「色はさまく。信濃なる」を④⑤「見るしなぐはしなのなる」
 「引きさ喰ふけしきは」を④⑤「ひきささきくらふ其けしき」
 「つなを引ぬる女三のみやの」を④⑤「つなをひかゆる女三のみや」

「柳桜に松楓」が④⑤には欠如している。

三 おわりに

詞章の異同について特徴的なものを説明したが、まとめると稿末の【表2】【表3】のようになる。網掛けしたところが、特に古浄瑠璃との相違や地域差が認められるところである。先に述べたように、段階的な変化が認められるが、⑱以外には、大きな詞章の改変はなく、享受地のことばに合わせた改変がいくらかなされたといえる。というよりは、長唄は古浄瑠璃の詞章をもとに、新たな詞章を付け加えたのである。長唄以外は、それぞれの太夫が語り、唄ったということは、節付けの違いでの勝負だったのであろう。段物としては、その趣向までも損り込むなど、近世芸能ならではのあり方がうかがえる。宮古路豊後掾の正本はいつの刊行かなどが不明であるが、詞章から見ると加賀掾正本に近く、上方の正本の特徴を持つと言える。

半太夫節、河東節の正本の詞章は上方の古浄瑠璃本ではなく、土佐少掾の詞章と最も近い関係にあり、そこから、江戸らしいことばへの変更改が行われている。節付けこそ異なるが、土佐節は胡麻章も多く、半太夫節、河東節と同時期に江戸で流行った。【表1】に示したとおり、『松平大和守日記』には、元禄七（一六九四）年三月十一日に土佐少掾の門弟の式部が《染小袖もよう》を、同年四月九日には、半太夫・初太夫による《小袖もよう》の演奏記録がある。ほぼ同じ歌詞の曲が異なる節付けで披露されたということである。【表3】4「すそ」から「すその」へ、7「にらみつめ」から「にらみつけ」へ、10「みす」から「こす」へ、12「くちばかのこ」の追加のように土佐節と半太夫節・河東節から詞章

が変ったものがみられる。

【表2】の1「あふたる」から「あひたる」へ、5「しつはりと」から「しうはり」とへ、9「ぼつかけ（おつかけ）／＼おいつめて（おつめて）」から「おつかけおつめ」と繰り返しなしに、14「一時」から「半時」への変更が、江戸で同時期に活躍した太夫のうち、土佐少掾が変更せず、半太夫、初世河東が改め、その後も使われた詞章である。

「しうわり（じうわり）」と「が特筆すべき語なのである。当時の流行語であり、初代尾上菊五郎について使われたことや、ことばに敏感で音曲にも詳しい式亭三馬も使ったことから、半太夫と初世河東が積極的にこのことばを振り込んだと推測できる。これは、その後も河東節引き継がれる。【表2】3「われもこう」と8「はつと」が、Ⅲにあたる半太夫と初世河東の『鳩鳥』と、初世河東が直の正本を出版する小松屋版のみの歌詞である。「女郎花」から「われもこう」、「ざつと（ざつと）」から「はつと」に変え、独自性を表したが、両語とも四世河東が「女郎花」「ざつと」に戻している。

なお、大坂で刊行の半太夫節正本は「しいわり」「かいで（楓）」といった上方のことばがそのまま残され、また「あふたる（会）」「ひととき（一時）」「みす（御簾）」「みな人」など、上方の古浄瑠璃と同様の詞章である。ただし、韻律を整えた「朽葉かのこ」「肩には雲に龍をそめ」など古浄瑠璃とは異なるところもいくつかある。

詞章については、半太夫節の正本をみても、上方、江戸での受け入れやすいことばへの改変があったが、節付けにもそれぞれの享受地でのアクセントを反映するのは、別稿に示した¹⁶⁾。

【注】

(1) 坂本清恵「近世音曲に反映するアクセント」『中近世声調史の研究』笠

間書院 二〇〇〇年

(2) 『花江都歌舞妓年代記 初篇 四』国立国会図書館（京2078）
稀音楽義丸編「長唄資料その二 大薩摩節」邦楽社 一九九四年

(3) 配川美加「長唄《小袖模様》の概要と音楽」日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画『江戸音曲の流れを考える―半太夫節から長唄へ―』二〇二四年三月一六日 発表

(4) 阪口弘之「出羽座をめぐる太夫たち―「道行揃」を手がかりに―」『人文研究』二六巻三号 一九七四年

(5) 阪口弘之「江戸板の効用―出羽掾作品を例に―」『古典の変容と新生』明治書院 一九八四年

(6) 阪口弘之「奥浄瑠璃本探索覚書―「松平大和守日記」万治草子列前後の諸作―」『奥浄瑠璃集「続」翻刻と論考』和泉書院 二〇二二年

(7) ①の愛知県立大学の挿絵に「まき物屋のていしゆ」、慶応大学の挿絵に「ひしやのていしゆ」、⑧の東京大学霞亭文庫本の挿絵には「ごふくやのていしゆ」の注記の外に菱形の中に「屋」が描かれ、菱屋が示されている。また、本稿で取り上げた正本では、松世の姫は会津で松屋に宿泊し、菱屋で小袖を誂えるのであるが、河東節の伝来を記す『江戸節根元集』には、「小袖模様」の紹介があり、そこには松世の姫が仙台まで道行し、仙台の大松屋で小袖を求めたとし、「今に仙台に大松屋といへる呉服屋栄へあるなり」としている。

なお、日本女子大学図書館では、外題『竹露随筆』、内題『江戸節根元集』(wa1685Gus)とする十寸見東佐と菅野(西山)吟平の印のある本を所蔵する。これは、奥書に「寛政十三年辛酉春 愚性堂 可柳」のあとに追記して「享和元年辛酉霜月廿八日 愚性堂可柳改 竹露庵 柳雅」とあるものに、さらに次の伊沢蘭軒の奥書がある。

「享和二年戊戌九月九日友人掖斎對校託姉君
登満子所贍写也吾家之子孫莫以末枝俚鄙之書
放漫放擲焉
蘭軒主人記」

(8) 「紙子ひひなかた」『傾城吉岡染』の以下の引用文のうち太字にしたところが、「こそでうり」と同様の詞章である。

「歌」よさこ《ユリ》ひの。たまづさつばさ。に。かけて。すそにかり田の。あきのかり《ユリヤクリ》すそを。《地ハルウ》すそを小づまにそめかけしは。《ウ》これぞ江戸《中》つま。《フシ》むさし野に《ノル》

一むら。ず、きうみかふり。《スエテ》そめかざしたるひあふぎや。《下キン》よしのがはには花るかだ。《ウ》立田山には《ウ》しかもみち。《フシ》かたから《ウ》おと《ハル》すきくのたき。《中》こんとあさぎの水だまをこいしちらしのはまちどり《歌》へはんまちどりの友よぶこゑは。ちりくやちりく。ちんちりめんさや、どんすのひひながた。《トル》三かほにかけしは。《上》八はしの。《フシ》さへににほふ。かきつばた。ねぜりおもだかさばぎ、やう。水にまかせて《ウ》そめしもしよし《ヲクリ》なみは。たつなみ《フシ》かたをなみ。《地》せいがい波に《ハル》あみの手や。しをりんどうをみなへし。一《キン》むらたけの《ウ》しげりには。千ばすゞめの《ウ》とびちがひかせにもまる、もやうも有。《ハツミ》ふじときよ見を。そめわけにすそにちもとの。《フシ》松原や。《中》田子の入うみ《ハル》ほかけふね。又やなぎに《ウ》雪ふりて。《ウ》えだもたはむやしつはりとへつもれるかけに。《フシ》白さぎの。もの《ハル》思ひげにつ、くりと。とまりたるひながた有。《中舞》扱。又。かたには《ウ》くもがくれ。月にゑんかう《ウ》松にこと。松をしぐれの《ハル》染かねて。《中》まくずが原の《ハル》こひかぜの《中ハル》ざ、んざ。さつとふき《ナラス》しほりたる。しほりぞめの《コハリ》もやうもあり。とや出のわしが《ウ》ゑにかつゑ。みやまをさがす所に。雪のねぎ、の其したに。あさるうさぎをめにかけてま一もんじにおとすを見て。うさぎはたにへにげんとするをほつかけ。くくををつつめひつかいつかんでいはほにのほり。引さきくらふ《地》其けしき。さもすさまじきもやうも有。《舞》みすにからねこゑほしにまり。ゑもんながしの《ウ》かしは木や。やなぎさくらまつ桐。《中》梅にうぐひす《ウ》水におし。まきのつれごま《コハリ》くるひじ、。てふにたんほ、つたかづらほうわうがらくさきりがらくさ。あふぎながしふでながしむしづくしかひづくし。こもん中がたちらしもんしほりがこのそめがのこ。うち出しがのこに《地》われくがこひに。こ、ろは《ウ》けしがのこも候と。ばちをとみだるれば《ウ》詞の花もうちしほれ。一せんの御合力なふ《フシ》おなさけ。あれとぞうたひける。」

『傾城吉岡染』の初演については、井上勝志「『傾城吉岡染』成立考―宝永七年上演の意味―『文学史研究』三三卷 一九九一年による。

(9) 注(5)に同じ。

(10) 吉野雪子氏ご教授による。

(11) 吉野雪子氏のご指摘による。

(12) 注(2)に同じ。

(13) 『歌舞伎評判記集成 第二期 第三卷』役者評判記研究会編 岩波書店 一九八八年

(14) 「かいてく」を襲の色目とするのは『日本古典文学全集』小学館など。「かいく」とするのは辻村敏樹編『とはすがたり総索引』笠間書院 一九九二年

(15) 『中世古辞書 四種研究並びに総合索引』風間書房 一九七一年

『全国方言集覧 近畿北陸篇』上下 生物情報社 二〇〇三年

(16) 坂本清恵「河東節のアクセント―『小袖模様』を例に―」『国文目白』六四 二〇二五年

【参考資料】

「松平大和守日記」『日本庶民文化史料集成』巻十二 三一書房 一九七七年

『鸚鵡籠中記』『名古屋叢書・校訂復刻 続編』第十一巻(鸚鵡籠中記3) 愛知県郷土資料刊行会 一九八三年

『日本語歴史コーパス』<https://cir.nii.ac.jp/chj/> JapanKnowledge Lib <https://japanknowledge.com/lib/>

この研究はJPS2K00133の助成を受けた。本稿をなすにあたり、閲覧翻刻掲載のご許可をくださった天理大学附属天理図書館をはじめ、愛知県立大学図書館、慶応大学図書館、国立音楽大学図書館、都立中央図書館、早稲田大学演劇博物館に御礼申し上げる。また、二〇二四年三月一六日に行った日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画シンポジウム「江戸音曲の流れを考える―半太夫節から長唄へ―」での「河東節《小袖模様》とアクセント」をもとに、諸本研究を加えたものである。ご参加いただき、ご意見、ご感想をお寄せいただいた方々に御礼申し上げます。

【表1】

寛文中頃か	一六六一～一六七三	*出羽掾	『和国美びじん人哥諍并こそでうり』①	
延宝二年五月十九日	一六七四	伊勢大掾上演	『和国美人哥論 六段』	『松平大和守日記』
天和三年十二月	一六八三	*出羽掾	「松よのひめ付タリこそでうり」『道行揃』②	*出羽掾・角太夫・文弥
貞享二年九月以降	一六八五	山本土佐掾	「小袖うり」『こそでうり』五段③	
元禄年間	一六八八～一七〇三	宇治加賀掾	「こそでうり」『紫竹集追加 九』④	
元禄五年五月二十五日	一六九二	江戸半太夫・初太夫	「まつよの姫、小袖のもよう・天狗揃」*⑧	『松平大和守日記』
元禄七年正月	一六九四	土佐少掾	『金山左衛門岩屋城大和廿四孝』四だん⑨	
元禄七年三月十一日	一六九四	式部	「染小袖もよう」	『松平大和守日記』
元禄七年四月九日	一六九四	半太夫・初太夫	「小袖のもよう」	『松平大和守日記』
宝永五年*	一七〇八	土佐少掾	「染小袖もよふ」『蘭曲後撰集二』⑩	
宝永七年四月以前	一七一〇	豊竹若太夫	「袂の白しほり」	
宝永七年	一七一〇	竹本筑後掾	「紙子ひひながた」『傾城吉岡染』	『鸚鵡籠中記』
享保四年三月	一七一九	半太夫・初河東	「小袖模様」『鴉鳥』⑪	
享保二年～九年	一七一七～一七二四	初河東	「小袖もよふ」小松屋⑫	
享保十九年春	一七三四	中村座	「小袖もやうのせりふかけ合」『十八公今様そが』	『花江都歌舞妓年代記』
宝暦九年以降	一七五九	四世河東	「小袖模様の段」『十寸見要集』初版⑬	

【表2】一行目には本文での説明番号を示した。

⑱	⑰	⑯	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	対象正本略称
長唄	世界	大坂板	いがや	井筒屋	十寸見	小松屋	鳩鳥	土佐少掾F	土佐少掾A	江戸板	知略	結城	豊後節	加賀掾	土佐掾	出羽掾F	出羽掾A
おみなへし	おんみなえし	をみなめし	をみなへし	女郎花	をみなへし	われもこう	われもこう	おみなべし	おみなへし	おみなめし	おみなめし	女郎花	おみなへし	をみなへし	おみなへし	おみなべし	おみなべし
	さつと	さつと	さつと	さつと	さつと	はつと	はつと	さつと	さつと	さつと	さつと	さざんざつと	さざんざつと	さざんざつと	さざんざつと	さざんざつと	さざんざつと
あふたる	あいたる	あふたる	あふたる	あふたる	あひたる	あひたる	あひたる	あふたる	あふたる	あふたる	あふたる	逢ふたる	あふたる	あふたる	あふたる	あふたる	あふたる
しうわりと	しうわりと	しいわりと	しうはりと	しうわりと	しうわりと	しうわりと	しうわりと	しつはり	しつはり	しつはり	しつはり	しつはり	しつはり	しつはり	しつはり	しつはり	しつはり
おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	追(ツ)かけ おつつめ	追欠をつつめ	おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	おっかけ おつつめ	ぼっかけ 追詰て	おっかけ おつつめ	ほっかけ おつつめ	ぼっかけ おつつめ	ぼっかけ おつつめ	ほっかけ おつつめ
のぼり	あがり	のぼり	上り	のぼり	あがり	あがり	あがり	のぼり	のぼり	上り	のぼり	上り	のぼり	のぼり	のぼり	のぼり	のぼり
はんととき	はんととき	ひととき	半とき	ひととき	半とき	半時	一時	一時	一時	一時	一時	一時	一時	一時	一時	一時	一時
さかせつつ	さっかせつつ	さっかせつ、	さっかせつ、	さっかせつ、	さっかせつ、	咲せつ	さかせつ、	さかせつ、	さかせ	さかせ	さかせ	咲せつ、	さかせつ、	さかせつ、	さかせつ、	さかせ	さかせつ、
																	3
																	8
																	1
																	5
																	9
																	9
																	14
																	13

【表3】

⑱	⑰	⑯	⑮	⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	対象正本略称
長唄	世界	大坂板	いがや	井筒屋	十寸見	小松屋	鳩鳥	土佐少掾F	土佐少掾A	江戸板	知略	結城	豊後節	加賀掾	土佐掾	出羽掾F	出羽掾A	4
もすそは	すそのは	すそは	すそのは	すそのは	裾野は	すそのは	すそのは	すそ野は	すそのは	すそは	すそは	すそは	すそには	すそは	すそは	すそは	すそは	7
にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	白眼付	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	にらみつ	10
みす	こす	みす	こす	こす	こす	こす	こす	こす	こす	みす	みす	美簾	みす	みす	みす	みす	みす	12
くちはがのこ	くちはがのこ	くちはがのこ	くちはがのこ	くちはがのこ	朽葉かのこ	くちはがのこ	朽葉かのこ	くちはがのこ	くちはがのこ	/	/	/	/	/	/	/	/	6
さてまたかたには	かたにわくもに	かたには雲に	かたには雲に	かたには雲に	肩には雲に	かたには雲に	肩には雲に	かたには雲に	かたには雲に	かたにはくもに	かたにくもに	扱亦肩には	扱又かたには	さてかたには	扱又かたには	扱かたには	扱かたには	5
たわわに	たわわに	たはゝに	たわゝに	たはゝに	たはゝに	たはゝに	たはゝに	たわゝに	たはゝに	たはゝに	たはゝに	撓や	たはむや	たはむや	たはむや	たはむや	たはむや	11
かえで	かえで	かいで	かへで	楓	楓 <small>カステ</small>	楓 <small>カステ</small>	楓	かえて	かえて	かへで	かゑで	かいて	/	/	かいで	かいで	かいで	12
はなひこ	みるひと	みな人	みる人	みる人	見る人	みる人	みる人	見る人	みる人	見る人	見る人	皆人	皆人	みな人	皆人	みな人	皆人	2
さきそめて	さきそめり	さきそめる	咲そめり	咲そめる	咲そめり	さくそめか	さく染か	さくそめか	さきそめり	さくそめか	さくそめか	咲染る	さきそむる	さきそむる	さきそむる	さくそめか	さくぞめか	

文字譜と鼓の掛け声は《》で文字の前におき、捨て仮名は《》で示した。大きな異同部
分は太字にした。

- ①《ふしゆり》むさしのに一《下》むら《上》す、《引》き《はつみ》ほにいで、みだれあふたるこそでも有
- ②《ふしゆり》むさしのに一《下？》むら《上》ず《引》、き《はつむ》ほにいで、みだれあふたる小袖も有
- ③《本ふし》むさし《引》のに一むら。《中》す、《上引》きほに出て。《地》みだれあふたる小袖もあり。
- ④《ハル》むさしのに。《冷泉》一村、ず《ハル》、き。ほに出て。《中》みだれあふたる《ウ》小袖も有。
- ⑤むさし野に一むら。ず、き。ほに出てみだれあふたる小袖もあり。
- ⑥武蔵野に一村、薄穂に出て、美垂れ逢ふたる小袖も有、
- ⑦むさしのに一村、す、きほに出て、みだれあふたる小袖も有、
- ⑧むさしのに一村、す、きほに出てみだれあふたる小袖も有
- ⑨へまづむさしのに一むら、ず、きほに出てみだれあふたる小袖も有
- ⑩へ《三重ヲロシ》先む《入》さし野に。一村《イロナカシ》す、きの。ほに出《引》て、み《ウク》だれあふたるこそでも有。
- ⑪《中》先武蔵野に。一むら薄ほに出てみだれあひたる。《下》小袖もあり。
- ⑫《中》まづむさしのに。ひとむら、ず、き《引上スエ》ほにいで、みだれあひたる。《下》小袖《ア》もあり。
- ⑬《中》まづむさしのに。一とむら、ず、き《引上スエ》穂^ほに出て乱れ^{みだ}あひたる。《下》小袖《ア》も有。
- ⑭へまづむさし野に。ひとむら、ず、き《引上スエ》ほに出て、みんたれあふたる、小袖《ア》もあり。
- ⑮へまづむさし野に。ひとむら、ず、き《引上スエ》ほにいで、みんたれあふたる。小袖も《ア》あり。
- ⑯まづむさし野に。一むら、ず、き《引上スエ》ほに出て。みんたれあふたる小袖で《ア》もあり。
- ⑰まづむさし野に。ひとむら、ず、き。ほにいで、みんたれあひたる。こそでも有
- ⑱むさし野に。ひとむら、ず、きほにいで、みだれあふたるもようもあり
- ①《いろ》よしのはつせの《下》花もみぢ今をさかりとみゆるも有
- ②《いろふし》よしのはつせの《下》はなもみぢ今をさかりとみゆるも有
- ③《下きんふし》よしのはつせの。《下》花もみぢ。《下きん》今をさかりとみゆるも有。
- ④《小ラクリ》吉野。はつせの花もみぢ《ハルフシ》今をさかりと。《ウ》見ゆるも有。

⑤《キン》よし野。《台手》はつせの花もみぢ。《はねはつみふし》今をさかりと《すへふし》見ゆるも有。

- ⑥吉野初瀬の華紅葉、今を盛りと見ゆるもあり、
- ⑦よしのはつせの花もみぢ、今をさかりと見ゆるも有、
- ⑧吉のはつせの花もみぢ今を盛りと見ゆるも有
- ⑨よしのはつせの花もみぢ今をさかりとみゆるも有
- ⑩よし野はつせの《上》花もみ《下》ぢ。《アミトヤツシ》今を《ハル》さかりと見ゆるも《下》あり。
- ⑪よしのはつせの。はなもみぢ。今をさかりとみゆるもあり。
- ⑫《イ》よしのはつせの。はな《入》もみぢ。《下》いまをさかりとみゆ《ア》るもあり。
- ⑬《イ》よし野はつせの。花《入》もみぢ。《下》いまを盛りとみゆる《ア》もあり。
- ⑭《イ》よしのはつせの。花《入》もみぢ。《下》いまをさかりと、見ゆ《ア》るもあり。
- ⑮《イ》よしのはつせの。花《入》もみぢ。《下》いまをさかりと見ゆる《ア》あり。
- ⑯よしのはつせの。花《入》もみぢ。《下》今をさかりと。みゆるもあり。
- ⑰よしのはつせの。はなもみぢ。いまを。さかりと。みゆるもあり
- ⑱吉野 初瀬の 花紅葉。いまをさかりと見ゆるもあり
- ①《ふし》月のめい所はお、けれど《はつみ》色はさまく《ふし》しなのなる
- ②《ふし》月のめいしよはお、けれど《はつみ》いろはさまくしなのなる
- ③《かん》月のめい所は。《かん》おほけれ《ゆり引》と《下》色は。《のるふし》さまくしなの《引》なる。
- ④《上》月の名所は。おほけれ。どみるしな。く《ア》はしなのなる。
- ⑤《上》月の名所は。おほけれど《おすふし》見るしな。くはしなのなる。
- ⑥月の名所は多けれど、色はさまくしなのなる、
- ⑦月の名所はおほけれど、色はさまく、しなの成
- ⑧月の名所はおほけれど色はさまくしなの成
- ⑨月の名所はお、けれど色はさまくしなの成
- ⑩《サナイ》月の。《イヤ》めいしよは。《キンムスビ》お、けれど。《レイセイカ、リ》色はさまくしなのなる
- ⑪《カ、ル》月の名所は多けれど色はさま《三重》く。信《クル》濃なる。
- ⑫《カ、ル》月のめいしよはおほけれど《引上》いろはさま《三重》く。《上クリ入》しなの《引》る。
- ⑬《カ、ル》月の名所はおほけれど《引上》いろはさまく。《上ツク入》信濃な《引》る。
- ⑭《下ノリ》月のめいしよは、お、けれど《引上ケ》いろは。《三重》さまく。《上クリ》しな《入》のな《引》る。

- 15 《下ノリ》月のめいしよは。お、けれど《引上ケ》いろは。《三重》さまぐ。《上クリ》しな《入》のな《引》る。
- 16 《下ノリ》月のめいしよは。おほけれど《引上ケ入》色は《三重》さまぐ。《上クリ》しな《入》なる。
- 17 つきのめいしよわおおけれど いろわ さまさま しなのなる
- 18 つきの名所はおほけれど いろいろ さまさま しなのなる
- ① おぼすて山やさらしなのさやけき月は《下》是ぞこの
- ② おぼすて山やさらしなのさやけき月は《下》これぞ此
- ③ 《地》をばすて山やさらしなの。《う》さやけき月は《つきゆり》是ぞこの。
- ④ おぼすて山やさらしなの。さやけき月は。これ。ぞこの。
- ⑤ 《地》おぼすて山やさらしなの。《ウ》さやけき月は。《ウ》是や此。
- ⑥ 尾羽捨山や更級の、さやけき月は是ぞ此、
- ⑦ おぼすて山やさらしなの、さやけき月は是ぞこの、
- ⑧ おぼすて山やさらしなのさやけき月は是ぞこの
- ⑨ おぼすて山やさらしなのさやけき月はこれぞこの
- ⑩ おぼ《二ツ三重》すて。山《ハル引》や。《中ギン》さらしな《ハル》の《引》。さやけ《ツク》き月は。是《入》そこの。
- 11 伯母捨山や。更科の。さやけき月はこれぞこの。
- 12 《ハル》おぼすて山や。さら《入》しなの。さやけき月は《ヲトシア》これぞこの。
- 13 《ハル》娘捨山や。さら《入》しなの。さやけき月は《ヲトシア》これぞこの。
- 14 《ハル》おぼすて。山や。さら《入》しなの。さやけき月は《ヲトシア》これぞ此
- 15 《ハル》おぼすて。山や。さら《入》しなの。さやけき月は《ヲトシア》これぞこの。
- 16 《ハル》おぼすて。山や。さら《入》しなの。さやけき月は《ヲトシア》これぞこの。
- 17 おぼすてやまや さらしなの。さやけきつさわ これぞこの
- 18 をばすて山や さらしなの。さやけき月は これやこの
- ① とくさをわけてさしもげにみが、れいづるその原や《引取三重》三川にかけし
- ② とくさを分てさしもげにみがかれ出るそのはらや《引取三重》三川にかけし
- ③ 《地》とくさをわけてさしもげに。《う》みが、れ出る《う》そのはらや《ひとつり》みか
はにかけし。
- ④ とくさを分てさしもげに。《ウ》みが、れ出るそのはらや三河にかけし。
- ⑤ とくさをわけ《一つゆり》て。さしもげに。《ウ》みが、れ出る。其はらやみかにはかけし
- ⑥ とくさを分てさらしなの、うかれて出ル其野ノ原や、参河になれは

- ⑦ とくさをはけてさしもげに、みが、れ出る其はらや、三川にかけし
- ⑧ とくさをわけてさしもげにみか、れ出る其はらや三河にかけし
- ⑨ とくさをわけてさしもげにみが、れ出るそのはらや三河にかけし
- ⑩ 《イロ詞》とくさをわけてさしもげに《イツヤ》。《サ、ナミフシ》みが、れ出るそのは
らや、《ウク》三河にかけし。
- ⑪ とくさをわけてさしもげに。みか、れ出る。《上》そのはらや三河にわたす
- ⑫ 《下》とくさをわけ《入》てさしもげに。みが、れいづる。《上》そのはらや《ヒセン》み
かわにかけし
- ⑬ 《下》とくさを分《ケ》《入》てさしもげに。みが、れ出《ツ》る。《上》そのはらや《ヒ
セン》参河にかけし
- ⑭ 《下》とくさを、わけ《入》てさしもげに。みが、れ出る。《イロ》そのはらや《ヒセンフ
シ》三川に、かけし。
- ⑮ 《下》とくさを。わけ《入》てさしもげに。みが、れ出る。《イロ》そのはらや。《ライ》
三《ヒセンフシ》川に。かけし。
- ⑯ 《下》とくさをわけ《入》てさしもげに。みが、れ出る。《色》そのはらや。《ヒセンフシ》
三河にかけし。
- ⑰ とくさをわけて さしもげに みがかれいづる そのはらや みかわにかけし。
- ⑱ とくさをわけて さしもげに みがかれいづる そのはらや 三河にかけし
- ① 《上引》八つはしの《ふし》さはべにほふかきつばた《下くるふし》ときをむかへて
- ② 《上引》八はしの《ふし》さわべにほふ《下》かきつばた《下くるふし》時を《中はる》
むかへて
- ③ 《上》やつはし《ゆり引》のさはべにほふ。《う》かきつばた。《下ゆり》とき《引》を。
《中持》むか。《上》へて
- ④ 八橋の。さはべにほふ。《キン》かきつばた。時を。む。《ハル》かへてノ《ユリ》。
- ⑤ 八《ツ》はしの。さはべにほふ。《ゆり》かき。《引》つばた。ときを《ウ》むかへてさ
きにけり。
- ⑥ やつはしの、沢辺にほふ杜若、色を迎へて
- ⑦ 八はしの、さはべにほふかきつばた、時をむかへて
- ⑧ 八つ橋のさはべにほふかきつばた時を向へて
- ⑨ 八橋の沢べにほふかきつばたときをむかへて
- ⑩ 八はしの《ハル本フシ》沢邊にほふ。かき《入》つばた。《イロヲトシ》時をむかへて
- ⑪ 八橋の。沢《上》辺に匂ふ。《地》かきつばた。時をむかへて
- ⑫ やつはしの。《ハル》さわ《上》べに《入》にほふ。《地コトバ》かきつばた。《イロ地》と
きをむかへて

- ⑬ 八ツ橋の。《ハル》沢《上》べに匂ふ。《地コトバ》杜若かきばら《色地》時をむかへて
- ⑭ やつはしの。《ハル》沢べに《入》にほふ。《コトハ》かきつばた《イロ地》時をむかへて
- ⑮ 八はしの。《ハル》沢べ《入》にほふ。《コトハ》かきつばた《イロヂ》ときをむかへて
- ⑯ やつはしの。《ハル》さわべに。にほふ。《コトハ》かきつばた《色地》ときをむかへて
- ⑰ やつはしの。さわべに。におお かきつばた。ときをむかえて
- ⑱ やつはしの。沢辺ににほふ。かきつばた。ときをたがえず

- ① 《はつみきをい》さきにけり花はむかしをわすれずしておなじ色かにさくぞめか
- ② 《はつむきおい》さきにけり花はむかしをわすれずして同いろかにさくぞめか
- ③ 《あたる》さきにけり《引》《地》花はむかしをわすれずして。《う》おなじ色かに《う

さくぞめ

- ④ さきにけり《ユリ》り。花はむかしをわすれずし。《ウ》同じいろかにさくぞめむる
- ⑤ 《地》花はむかしをわすれずして。《ウ》同じ色かにさくぞめむる
- ⑥ 咲にけり、華は昔しを忘れたり、同じ薫かほひに咲染る
- ⑦ さきにけり、花はむかしをわすれずして、おなじ色かにさくぞめか、
- ⑧ さきにけり花は昔をわすれずして同色かにさくぞめか
- ⑨ さきにけり花はむかしをわすれずしおなじ色かにさくぞめり
- ⑩ さきに《ユリステ》にけり。《イロ》花はむかしをわすれずし。《下ノリ》おなじいろかに

さくぞめか

- ⑪ 咲にけり。《ハル》花はむかしをわすれずして。おなじいろ香にさく染か
- ⑫ さきにけり。《ハル》花はむかしをわすれずして。《シヨリ》おなじいろかにさくぞめか
- ⑬ 咲にけり。《ハル》花は昔むかしを忘わすれずして。《シヨリ》おなじ色かに咲ぞめり
- ⑭ さきにけり。《上シヨリ》花はむかしをわすれずして《シヨリ》同シ色かに咲ぞめる
- ⑮ さきにけり。《上シヨリ》花はむかしをわすれずして。《シヨリ》おなじ色かに咲ぞめる
- ⑯ さきにけり。《上シヨリ》花はむかしをわすれずして。《シヨリ》おなじいろかにさくぞめる。
- ⑰ さきにけり。はなわむかしをわすれずして。おなじいろかに。さくぞめり
- ⑱ さきみだれ。はなはむかしを忘れずして。おなじ色香にさくぞめて(略)

- ① 《ふし》き、やう《七つゆり》かるかや《ふし》おみなべし《ちことは》八重山ぶきとうすむらさき
- ② 《ふし》ききやう《しつゆり》かるかや《ふし》おみなべし《地》やえ山ぶきとうすむらさき
- ③ 《七つゆり》き、やうかるかやおみなべし。《地》やへ山ぶきとうすむらさき
- ④ き、やうかるかや。ノヨ。をみなへし。やえ山ぶきとうすむらさき
- ⑤ き、やうかる《かはり七つゆり》かやおみなべし。やへ山ぶきと。《ウ》うすむらさき

- ⑥ 桔梗、菫、女郎花、八重山吹に薄紫の
- ⑦ ききやうかるかや、おみなめし、八重山ぶきとうす紫の
- ⑧ ききやうかるかやおみなめし八重山ぶきとうすむらさき
- ⑨ き、やうかるかやおみなへし八重山ぶきとうすむらさき
- ⑩ き、やう。《サシ》かる《ハル》かや。おみ《ユリステ》なべし《イツヤ》。《下》八重山ぶきと。《ハル》うすむ《トル》らさき。
- ⑪ き、やうかるか《ユリ》やわれも《ユリ》う八重やまふきと。うす紫の
- ⑫ 《三ツ地ヲクリ》き、やうかるか《ユリ》やわれも《ユリ》こうや《ハル》え山ぶきと。
- ⑬ 《三ツ地ヲクリ》き、やう刈萱かきくさをみな《ユリ》へし《ハル》やえ山吹と。薄うすむらさきの
- ⑭ 《三ツ地送り》き、やう。《本ユリ》かるかや、女郎《ユリツギ》花や《ハル》え山ぶきと。《イ》うす紫の
- ⑮ 《三ツ地ヲクリ》き、やう。《本ユリ》かるかやをみなへ《ユリツ、キ》し《ハル》やへ山ぶきと。《イロ》うすむらさきの
- ⑯ 《三ツ地ヲクリ》き、やう。《本ユ》かるかや。をみなめし《ユリツギ》八重《ハル》山ぶきと。うすむらさきの

- ① ふちの花をあらそふ花づくし《ふしはつみ》ふちとみをとそめ《ゆり》わけて
- ② ふちの花いろをあらそふ花づくし《ふしはつみ》藤とみをとそめわ《ゆり》けて
- ③ ふちの花。《う》色をあらそふ《う》花づくし。《下はつみ》ふじとみほととそめわけに。
- ④ 藤の花。《ウ》色をあらそふ花づくし。ふじとみほととそめ。分に。
- ⑤ 藤の花。《ウ地》いろをあらそふ花づくし。《色地》ふじとみおとを染わけに。
- ⑥ 藤の華、色を争ふ花尽し、我が身のほとを染別けに、
- ⑦ 藤のいろをあらそふ花づくし、ふしとみをとそめわけに、
- ⑧ ふちの色をあらそふ花づくしふじとみをとそめわけに
- ⑨ ふちの花色をあらそふ花づくし富士とみをとそめわけに
- ⑩ ふち《入》のはな。《レイセイガ、リ》いろをあらそふ花づくし。《上ノリハコビ》ふじとみほととそめわけに《イツヤ》。
- ⑪ 藤のはな。《下》いろをあらそふ花づくし不二と。《上》三保とをそめわけて。
- ⑫ 藤《ア》の花。《下》色をあらそ《ウ》ふ花づくしふ《引》じと《上》みほととそめわけて。
- ⑬ 藤《ア》の花。色をあらそ《ウ》ふ花尽し《引》富士と。《上》み保とを染わけて。
- ⑭ 藤《ア》の花。《下》色を。あらそ《ウ》ふ花づくし《引上》ふじと《サシ》みほとを染

わけに。

15 藤の《ア》花。《下》色をあらそ《ウ》ふ花づくし《引上》ふじと。《サシ》みほとをそめわけに。

16 ふちはな。《下》色をあらそふ花づくし《引上》ふじと《サシ》みほとをそめわけに。
17 ふちはな。いろをあらそふはなづくし。ふちとみをとを。そめわけ。
18 藤の花。いろをあらそふはなすすき。不二と三保とを。そめわけ。

① すそはたこのうらなれや《上いろ》あつまからげのしほ衣

② すそはたこのうらなれや《上いろふし》あつまからげのしほ衣

③ 《地》すそはたこのうらなれや《くり上》あつまからげのしほ衣。

④ 《ユリ》すそはたこのうらなれやあづま。からげの《ウ》しほ衣も。

⑤ 《ウ地》すそはたこのうらなれや。《ウ》あつまからげのしほ衣も。

⑥ すそは田子の浦なれや、吾妻からけの塩衣、

⑦ すそはたこのうらなれや、あつまからげのしほ衣も、

⑧ すそはたこのうらなれやあつまからげのしほ衣も

⑨ すそはたこのうらなれやあつまからげのしほ衣

10 すそ野は田子のうらなれ《ユリステ》や。《イロ》あつまから《入》げのしほ衣も。

11 すそは田子のうらなれや。あつまからげのしほ衣。

12 すそは田子の《ヒキ上》うらな《スエ》れや。《ウタイ》あつまからげのしほ衣《引》も。

13 裾野は田子の《ヒキ上》浦な《スエ》れや。《ウタイ》あつまからげの塩衣《引》。

14 すそは田子の《ヒキ上ケ》浦な《スエ》れや。《ウタヒ》あつまからげのしほ衣《引》も。

15 すそは田子の《上キン上ケ》浦なれ《スエ》や。《ウタヒ》あつまからげのしほ衣《引》も。

16 すそは田子の《引上》うら《スエ》なれや。《ウタヒ》あつまからげのしほ《引》衣。

17 すそはわ たこのうらなれや あつまからげのしほ衣も

18 もすそは田子のうらなみや あつまからげのしほ衣も (略)

① 《下をん》きつれてしほをくむていか《色ふし》まつだやなぎにゆきふりて

② きつれてしほをくむていか《いろ》まつたやなぎにゆきふりて

③ きつれてしほをくむていか。又柳に雪ふりて。

④ きつれてしほをくむていか。まつた柳に雪ふりて。

⑤ 《つなきふし》きつれてしほをくむていか。《色地》又やなぎに雪ふりて

⑥ 着つれて塩を汲む寐か、亦是柳に雪降りて、

⑦ きつれてしほをくむていか、まつた柳に雪ふりて、

⑧ きつれて塩をくむていかまつた柳に雪ふりて

⑨ きつれてしほ、くむていかまつた柳に雪ふりて

10 《リヨ》きつれてしほをくむてい《引》か。《ギン》まつた柳に雪ふりて。

11 《下》きつれて汐を汲ていか《下》まつた柳に雪降りて。

12 《下》きつ《入》れてしほをくむてい《ア》いか《下》まつた柳に雪ふり《引》て。

13 《下》きつ《入》れて汐をくむ《ア》ていか《下》まつた柳に雪ふり《引》て。

14 きつれてしほをくむ《ア》ていか。まつた柳に雪ふり《引》て。

15 きつ《入》れて塩をくむ《ア》ていか。まつた柳に雪ふり《引》て。

16 きつ《入》れてしほをくむていか。まつた柳に雪ふり《引》て。

17 きつれてしほをくむていか。まつたやなぎに。ゆきふりて

18 しほにきつれてしほをくむていか。まつたやなぎに。ゆきふりて

① 糸だもたはむや《下いきこみ》しづはりともれるかげに《いろゆりふし》白さきの《地》ものわびしげに

② 糸だもたはむや《下いきこみ》しいわりともれるかげに《ゆりふし》しらすさきのものわびしげに

③ 糸だもたはむやしつはりと《上う》つもれるかげに《つきゆり》しらすさきの。《地》物わびしげに

④ 《ハルウ》えだもたはむやしつはりと。つもれるかげに。しらすさき《ユリ》の。物わびしげに。

⑤ 《おくりふし》糸だもたはむや。《しづめて》しつはりとつもれるかげに。《つきゆり》しらすさきの。物わびしげに

⑥ 枝も撓や、しつはりと積もれる蔭に、白鷺の物わびしげに、

⑦ 糸だもたは、にしつはりと、つもれるかげに、しらすさきの物わびしげに、

⑧ 糸だもたは、にしつはりと、つもれるかげに、しらすさきの物わびしげに

⑨ 糸だもたは、にしつはりと、つもれるかげに、白さきの物わびしげに

⑩ 糸だもたは、にしつはりと。つもれるか《サツマウツリ》げにしらすさき《引》の。《下》ものさひしげに。

⑪ 枝もたは、にしつはりと。つもれるかげに、白鷺の。ものわびしげに

⑫ 《上キン》糸だもたは、に《イロコトハ》しうわりと。つもれるかげにしらすさきの。《イ》物わびしげに

⑬ 《上キン》枝もたは、に《色詞》しうわりと。つもれる蔭にしらすさきの。《イ》物わびしげに

⑭ 《上キン》枝もたは、に《イロコトハ》しう《ウヒテ》わりと。つもれるかげにしらすさきの。《イ》物《地》わびしげに

⑮ 《上キン》糸だもたは、に《イロコトハ》しう《ウヒテ》はりと。つもれるかげにしらすさきの。《色地》物わびしげに

- 16 《上キン》ゑだもたは、に《色コトハ》しい《ウ》わりと。つもれるかけにしらさぎの。《地》物わびしげに
 17 えだも たわわにしうわりと つもれるかけにしらさぎの ものわびしげに
 18 杖もたわわにしうわりと つもれるかけに しらさぎの ものわびしげに
- ① つつくりと 《いろふし》とまりたるても有 《引》《まいせめふし》扱かたにはりやうをそめ
 ② つつくりと 《いろふし》とまりたるても有 《引》《まいせめ》扱かたにはりやうをそめ
 ③ つつくりと。とまりたるても 《引》有 《下せめ》扱又かたにはりやうをそめ。
 ④ つつくりと。とまりたるても有。さて。かたには龍をそめ。
 ⑤ つつくりと。《すへふし》とまりたるても有。《コハリ》扱又。かたには龍をそめ《引》。
 ⑥ つつくりと泊りたる躰も有、扱亦肩には龍を染、
 ⑦ つつくりととまりたるても有、かたにくもに龍をそめ、
 ⑧ つつくりととまりたるても有かたにはくもにりやうをそめ
 ⑨ つつくりととまりたるても有かたには雲に龍をそめ
 10 つ《ツメ》、くり《下ノリ》ととまりたるても有。《クドキ》かたには雲に龍をそめ《イツヤ》。
 11 つつくりと。とまりたる躰も有肩には雲に龍をそめ。
 12 つつくりと。とまりたるて《ア》いも有《上ノリ》かたには雲に龍をそめ。
 13 つつくりと。とまりたる躰も有《上ノリ》肩には雲に龍をそめ。
 14 つつくりと。泊りたるて《ア》いも有《上ノリ》かたには雲に龍を染。
 15 つつくりと。とまりたるてい《ア》も有。《上ノリ》かたには雲に龍をそめ。
 16 つつくりと。とまりたるても有。《上ノリ》かたには雲に龍をそめ。
 17 すつくりと とまりたる ても有 かにわ くもにりよをそめ
 18 すつくりと とまりたる ても有 きてまたかたには《略》のほり龍《略》
- ① すそにはとらのうそふきて《はる》たけつてりやうをにらみつめたがいにあらそふもやうも有
 ② すそにはとらのうそふきて《はる》たけつてりやうをにらみつめたがいにあらそふもやうも有
 ③ 《中》すそにはとらのうそふきて。たけつてりやうをにらみ付。たがひにあらそふもやうも有。
 ④ 《コハリ》すそには虎のうそふきて。たけつて龍をにらみ付。たがひにあらそふもやうもあり。
 ⑤ 《ウコハリ》すそには虎のうそふきて。たけつて龍をにらみ付。《すへふし》たがひにあ

- らそふもやうもあり。
 ⑥ 裾には虎の嘯て、猛て龍を白眼付、互に争ふ模様もあり、
 ⑦ すそには虎のうそふきて、たけつて龍をにらみ付、たがひにあらそふもやうも有、
 ⑧ すそにはとらのうそふきてたけつて龍をにらみ付互にあらそふもやうも有
 ⑨ すそにはとらのうそふきてたけつて龍をにらみ付互にあらそふもやうも有
 10 《サッナミ》すそにはとらのうそふきて。《フシノリ》たけつて龍をにらみ付《イロラク》
 ⑪ 裾には虎の嘯て。たけつて龍をにらみ付。互にあらそふ模様もあり
 12 すそにはとらのうそふきて。《地アタル》たけつて龍をにらみ付。たがひにあらそふもやうも有
 ⑬ すそには虎の嘯て。《地アタル》たけつて龍をにらみ付。互に諍ふ模様《ア》も有
 ⑭ すそにはとらのうそふきて《地アタル》たけつて龍をにらみ付。たがひにあらそふもよふ《ア》も有
 ⑮ すそにはとらにうそふきて。《地アタル》たけつて龍をにらみ付。たがひにあらそふもよふ《ア》も有
 16 すそにはとらのうそふきて。《地ア》たけつて龍をにらみ付。たがひにあらそふもやうも有
 17 すそにわとらのうそふいて たけつてりよ才をにらみ付 たがひにあらそふもよ才もあり
 18 すそにはとらのうそふいて たけつて龍をにらみ付 たがひにあらそふ模様もあり
- ① 一きのまつの其したに《下おん》ことを色よくそめなしてみねのまつかせぎ、ざつとふき
 ② 一木の松のその下に《下おん》ことをいろよくそめなしてみねのまつかせぎざつとふき
 ③ 一木の松の其下に。ことを色よくそめなして。みねの松かせぎざつとふき
 ④ 《中》一木のまつのその下に。ことをいろよくそめなして。みねの松風ざつとふき
 ⑤ 《キン》一《ト》木の松の其したに。ことをいろよくそめなして。《キンかはり》みねの松風ざつとふき
 ⑥ 一と木の松の其下に、ことを色能く染なして、峰のざざんざんと吹、
 ⑦ 一本の松の其下に、ことをいろよくそめなして、みねの松風ざつとふき、
 ⑧ 一木の松の其下にことを色よくそめなしてみねの松かせぎざつとふき
 ⑨ 一木の松の其下にことを色よくそめなしてみねの松風ざつとふき
 10 《下ノリ》一木の松のその下に。《上》琴を《イロナガシ》いろよく。そめなし《引》て。みね《本手》の《片タヤツシ》
 11 ひとつ木の松の。其下に琴をいろよくそめなして。峯《上》のま《ハル》つかせ。はつと吹
 12 ひとつ木《人》の松の。其《人》下に琴をいろよく染なして。みね《上》の。《ハル》松風。

はつとふき

13 一(ト)木《入》の松の。其《入》下に琴を色よく染なして。峯の。《ハル》松風さつと吹(キ)

14 ひと木《入》の松の。其《入》下に。ことを色よく染なして。《上ハル》みねの《カンスエ》松風さつとふき

15 ひと木《入》の松の。其《入》下に。ことを色よく染なして。《上ハル》みねの。《カンスエ》松風さつとふき

16 ひと木《入》の松の。其《入》したに。ことを色よく染なして。《上ハル》みねの《カンスエ》松風さつとふき

17 ひとときのまつつ そのしたに。こといろよくそめなして。みねのまつかせ さつとふき

18 (なし)

1 しらぶることのさもありくとみゆる《いろふし》も《引》有《下をんせめ》とやいでのわしがえにかつえ

2 しらぶることのさもありくとみゆるも《いろ》あり《ふし引下おんせめ》とやいでのわしがえにかつえ

3 しらぶることの。さもありくとみゆるも《引》有《下》とやでのわしがえにかつえ。

4 しらぶることの。《ナラス》さもありくとみゆるもあり。《下》とや出のわしが《ハル》えにかつえ。

5 しらぶることの。さもありくと。《コハリ》見ゆるもあり。《ウコハリ》とや出のわしがえにかつえ。

6 調へる琴のさもありくと見ゆるもあり、とやでの驚か餌に渴れ、

7 しらぶることのさもありくと見ゆるも有、とや出のわしがえにかつえ、

8 しらぶることのさもありくと見ゆるも有とやでのわしかえにかつえ

9 しらぶることのさもありくとみゆるも有とやでのわしかえにかつえ

10 《ハル》しらぶる《トル》琴の《イツヤ》。《早イロナゲ》さもありくと《ハル》と見ゆるもあり。とやでのわしがえにかつえ。

11 しらぶる琴の。さもありくと染しも有。《ウ》とや出のわしか餌にかつえ。

12 《上イロ》しらぶる琴の。さもありくと見ゆるも有。《ウノリ》とや出のわしがえにかつえ。

13 《上色》調る琴の。さもありくと見ゆるも有。《ウノリ》とや出の驚がえにかつえ。

14 しらぶることの。《イヤ》さもありくとみゆるも有。《中キンノリ》とやでのわしがえにかつえ。

15 《上色》しらぶることの《イヤ》さもありくとみゆるも有。《中キンノリ》とやでのわしがえにかつえ。

16 《上色》しらぶることの《イヤ》さもありくとみゆるも有。《中キンノリ》とやでのわしがえにかつえ。

17 しらぶることの。さもありありとみゆるもあり。とやでのわしかえにかつえ

18 (なし) とやでのわしがえにかつえ

1 み山をさがす所に。一村竹の其下にあさるうさぎをみ付つ、《せめ》ま一もんにしに

2 みやまをさがすところに。一むらたけのそのしたにあさるうさぎを見付つ、《せめ》ま一もんにしに

3 《中》み山をさがす所に。一むらたけの其下に。あさるうさぎを見付つ、ま一もんにしに

4 みやまをさがすところに。一むらたけのそのしたに。あさるうさぎを見付つ、ま一もんにしに

5 みやまをさがす所に。太夫 一トむら竹のそのしたに。あさるうさぎを見付つ、ま一もんにしに

6 深山をさがす所に。一と村竹の其下に。あさる兎を見付つ、マア一文字に

7 みやまをさがす所に。一むら竹の其下に。あさるうさぎを見付つ、ま一もんにしに

8 み山をさがす所に。一むら竹の其下にあさるうさぎを見付つ、まいちもんにしに

9 み山をさがす所に。一むらたけの其下にあさるうさぎを見付つ、ま一もんにしに

10 《ギン》み山を。さがす所に。一むら《ハコビ》たけのその下に。あさるうさぎを見付つ、ま一もんにしに

11 みやまをさがす所に。一むら竹の其下に。あさるうさぎを見付つ、ま一もんにしに

12 みやまを《コトハ》さがす所に。ひとむら竹の其下に。《地》あさるうさぎを見付つ、《アタル》ま一もんにしに

13 みやまを《コトハ》さがす所に。一《ハ》むら竹の其下に。《地》あさる兎を見付つ、《アタル》ま一もんにしに

14 み山を《コトハ》さがす所に。一村竹の其下に。《地》あさる兎を見付つ、《アタル》ま一もんにしに

15 み山を《コトハ》さがす所に。一村竹の其下に。《地》あさる兎を見付つ、《アタル》ま一もんにしに

16 み山を《コトハ》さがす所に。一むらたけの其下に。《地》あさるうさぎを見付つ、《アタル》ま一もんにしに

17 みやまをさがすところに。ひとむらたけの。そのしたに。あさるうさぎを。みつつけつ

18 みやまをさがすところに。ひとむらたけの。そのしたに。あさるうさぎを。みつつけつ

- ① おとすをみてうさぎはたにへにげんとするを《いるせめことば》ほつかけくおいつめて
- ② おとすをみてうさぎはたにへにげんとするをほつかけくおいつめて
- ③ おとすをみて。うさぎはたにへにげんとするをほつかけくおいつめて
- ④ おとすを見て。うさぎはたにへにげんとするをほつかけくおいつめて
- ⑤ おとすを見て。ウキ。うさぎは谷へにげんとするを。おつかけ。ウキく。
- ⑥ 落すを見て。兎は谷へ逃んとするを、ほつかけく追語て、
- ⑦ おとすを見て、うさぎはたにへにげんとするを、おつかけくおいつめて、
- ⑧ おとすを見てうさぎは谷へにげんとするをおつかけくおいつめて
- ⑨ おとすをみてうさぎはたにへにげんとするをおつかけくおいつめて
- ⑩ かけおとすを見てうさぎは。谷へにげんとするを。ノリミ。おつかけくおいつめ
- ⑪ おとすをみて。兎は谷へ逃んとするを追欠《アイ》をつつめ
- ⑫ おとすをみて。うさぎは谷へにげんとするをおつかけ《アイ》おつつめ
- ⑬ 落すをみて。兎は谷へにげんとするを追《ツ》かけ《アイ》おつつめ
- ⑭ おとすをみて。兎はたにへにげんとするをおつかけ。《相手》おつつめ
- ⑮ をとすおみて。兎は谷へにげんとするをおつかけ。《相ノ手》おつつめ
- ⑯ おとすをみて。うさぎはたにへにげんとするをおつかけ《合》おつつめ
- ⑰ おとすをみて。うさぎわたにえ。にげんとするをンおつかけ。おつつめ
- ⑱ かけおとすをみて。うさぎは谷へ。にげんとするを。おつかけ。おつつめ
- ① ひとつかいつかんでいわをにのほりひきさきくらふけしきを《おとし》さも
- ② ひとつかいつかんでいわほにのほりひきさきくらふけしきをさも
- ③ ひとつかいつかんでいはほに上り。引さきくらふけしきをさも
- ④ ひとつかいつかんでいはほにのほり。ひきさきくらふけしきを。《ナラス》さも
- ⑤ 二人。ひとつかいつかんでいはほにのほりひきさきくらふけしきを。さも
- ⑥ 引かい摺て巖へ上り、引さき喰ふ気色をさも
- ⑦ ひとつかいつかんで岩ほにのほり、引さきくろうけしきを、さも
- ⑧ ひとつかいつかんで岩ほに上り引さきくらふけしきをさも
- ⑨ 引かい一つかんでいはほにのほり引さきくらふけしきをさも
- ⑩ 引かい一つかんでいわほにのほり。ひきさき。くらふけしきを。さも。
- ⑪ 《アヒ》引かい一つかんでいわほにのほり。引さき喰ふけしきはさも。
- ⑫ 《アイ》ひつかいつかんでいはほにのほり。引さきくらふけしきはさも
- ⑬ 《アイ》ひつかいつかんで巖にあり。《大アタリ》引さきくらふけしきはさも
- ⑭ 《相手》ひつかいつかんで岩ほにのほり。《大アタリ》引さきくらふけしき《ア》をさも
- ⑮ 《相ノ手》ひつかいつかんで岩ほに上り。《大ツメアタリ》引さきくらふけしき《ア》をさも。

- ⑯ 《合》ひつかいつかんで岩ほにのほり《大アタリ》引さきくらふけしき《ア》をさも
- ⑰ ひつかいつかんでいわをにあり。ひきさきくろをけしきわさも
- ⑱ ひつかいつかんでいわおにのほり。ひきさきくろふけしきをさも
- ① すさまじくせめし《引》もあ《引》り《まいふし》みすのひまより《もつ》からねこ《引》の
- ② すさまじくせめしもあ《引》り《まいふし》みすのひまより《もつ》からねこの
- ③ すさまじくせめしも《引》有。《まひふし》みすのひまよりからねこの。
- ④ 《ハル》すさまじくせめしもあり。《舞》みすのひまよりか《ウ》らねこの。
- ⑤ すさまじくせめしもあり《キン》。一人。《まひ》みすのひまより。からねこの。
- ⑥ 冷敷染しもあり、美簾のひまより唐猫の
- ⑦ すさまじくせめしも有、みすの隙よりからねこの
- ⑧ すさまじくせめしも有みすのひまよりからねこの
- ⑨ すさまじくせめしも有こすのひまよりからねこの
- ⑩ 《ホホウ》《中ギン》すさまじくせめしもあり《イヤア》《イロギン》こすのひまよりからねこの。
- ⑪ すさまじく染しも有。こすのひまよりからねこの。
- ⑫ す《マイカ、リ》さまじ《引》くせめしも有《引》。《上キン》こすのひまよりからねこの。
- ⑬ 《マイカ、リ》すさまじ《引》く染しも有《引》。《上キン》こすのひまよりから猫の。
- ⑭ 《イヤ》す《舞カ、リ》さまじ《引》く。せめしも有《引》。こ《上キン》すの隙よりからねこの。
- ⑮ 《イヤ》す《マヒカ、リ》さまじ《引》く。染しも有《引》。《上キン》こすの隙よりからねこの。
- ⑯ 《イヤ》す《舞カ、リ》さまじくせめしもあ《引》り。《上キン》みすの隙よりからねこの。
- ⑰ すさまじくせめしもあり、こすのひまよりからねこの
- ⑱ すさまじくせめしもあり。みすのひまより。からねこの
- ① つなをひきぬるによさんのみや《すかたをみぞ》め《色》れんぼのや《下まいふし》みにまよふかしはぎの
- ② つなをひきぬるによさんのみやすかたを見せめれんぼの《下まい》やみにまよふかしわきの
- ③ つなを引ぬる女三のみや。すがたをみぞめ。れんぼのやみにまよふかしはぎの。
- ④ つなをひかゆる女《ウ》三のみや。姿を見せめ。《ハル》恋慕のやみにまよふかしはぎの。
- ⑤ つなをひかゆるによさんのみや。すがたを見せめ。《ウキン》れんぼの。やみにまよふかしは木《引》の。

- ⑥綱を引ぬる女三の宮、すかたを見染、恋慕のやみにまよふかしわきの
- ⑦つなを引ぬる、女この宮のすかたを見せめ、れんぼのやみにまよふかしわ木の、
- ⑧つなを引ぬる女三のみやのすかたを見せめれんぼのやみにまよふかしわ木の
- ⑨つなを引ぬる女三の宮のすがたを見せめれんぼのやみにまよふ柏木の
- ⑩つなをひきぬる女三の。みやのすがたをみそめて《クリ》れ《上キン》んぼのやみに、ま《下引》よふ、《ギン》かしわ木の
- ⑪《ウ》つなを《上》引ぬる女三の《ハル》みやの《ハル》姿を見せめれんぼのやみにまよふ柏木の。
- ⑫《ウ》つなを《上》引ぬる女三の《ハル》宮の《ハル》姿を見せめれんぼのやみにまよふ柏木の
- ⑬綱を引ぬる女三の《ハル》宮の姿を見せめれんぼのやみにまよふ柏木の
- ⑭《上キンカハリ》つなを引ぬる女三の、《カサネ》宮の姿をみせめれんぼの、やみにまよふ柏木の
- ⑮《キンカハリ》つなを引ぬる女三の。《カサネ》宮のすがたをみせめれんぼの、やみにまよふかしわ木の。
- ⑯《上キンカハリ》つなを引ぬる女三の。《カサネ》宮の姿を見せめれんぼのやみにまよふ柏木の。
- ⑰つなをひきぬるによさんのみやのすがたをみそめ、れんぼのやみにまよふかしわ木の
- ⑱つなをひきぬる女三の宮の、すがたを、見せめ、れんぼのやみにまよふかしわ木の
- ① ちもんながしのまりのにはやなぎさくらに《おとし》まつかいで、《色》むめに、うくひすもみちにしか
- ② ちもんながしのまりのにはやなぎさくらに《おとしまいふし》まつかいで《はる》むめにうくひすもみちにしか
- ③ ちもんながしのまりのには、《中》やなぎさくら松かいで、むめにうくひすもみちにしか。
- ④ ちもんながしのまりの庭。《コハリ》むめにうくひすもみちに《色》しか。
- ⑤ 《ウコハリ》ちもんながしのまりのには、梅にうくひすもみちにしか
- ⑥ ちもんながしの松の庭、柳さくら、まつかいて、梅に鶯、紅葉に鹿、
- ⑦ ちもんながしのまりのには、柳桜に松かえて、梅に鶯、もみちにしか、
- ⑧ ちもんながしのまりのには柳さくらに松かへてむめに鶯もみちにしか
- ⑨ ちもんながしのまりの庭やなぎさくらに松かえて梅にうくひすもみちにしか
- ⑩ 《ギンハル》ちもんながしのまりの庭。柳《ハル》桜に松かえて梅に鶯もみちにしか《イヤ》
- ⑪ ちもんながしのまりの庭。《ノリ》柳桜に松楓、梅に鶯もみちに鹿。
- ⑫ ちもんながしの鞠《ア》のには、《ユリ》柳桜に松楓、梅にうくひすもみちにしか。

- ⑬衣紋流しの鞠《ア》の場《ユリ》柳桜に松楓、梅に鶯もみちに鹿。
- ⑭ ちもんながしのまりのには《イヤ》柳桜に松楓、梅に鶯もみちに《ア》にしか。
- ⑮ ちもんながしのまりのには《イヤ》柳桜に松かへて、梅にうくひすもみちに《ア》にしか。
- ⑯ ちもんながしの鞠のには《イヤ》やなぎ桜に松かいで、梅にうくひす紅葉にしか。
- ⑰ ちもんながしのまりのにわ、やなぎさくらにまつかえて《シ》めにうくひすもみちにしか
- ⑱ ちもんながしのまりのにわ、やなぎさくらにまつかえて、うめにうくひすもみちにしか
- ① 《まいせめ》竹にすゞめや花にてうませの八重きくつたかづら
- ② 《まいぜめ》たけにすゞめや花にてうませのやえきくつたかづら
- ③ たけにすゞめや花にてふ。ませのやへきくつたかづら。
- ④ たけにすゞめはなにてふ。ませのやえきくつたかづら。
- ⑤ 竹にすゞめ花にてふ。ませのやへきくつたかづら。
- ⑥ 竹に雀や、花に蝶、柵に八重菊葛ら、
- ⑦ 竹にすゞめや、花にてふ、ませの八重きく、つたかづら、
- ⑧ 竹にすゞめや花にてふませのやえきくつたかづら
- ⑨ 竹にすゞめや花にてうませの八重きくつたかづら
- ⑩ 竹にすゞめや花にてふ《イヤ》。ませの八重菊つたかづら
- ⑪ 竹に雀やはなに蝶。ませの八重菊つたかづら
- ⑫ 《コトハノリ》竹にすゞめや花に《タ、ム》てふ。《ノリ》ませのやえきくつたかづら
- ⑬ 《コトハノリ》竹にすゞめや花に《カ、ル》蝶。《ノリ》ませのやえきくつたかづら
- ⑭ 《コトハノリ》竹にすゞめや花に《タ、ム》てう、ませの八重菊つたかづら
- ⑮ 《コトハノリ》竹にすゞめや《タ、ム》花にてふ。《持合ノリ》ませのやへ菊つたかづら
- ⑯ 《コトハノリ》竹にすゞめや花に《タ、ム》てふ。《持合ノリ》ませの八重菊つたかづら。
- ⑰ たけにすゞめや、はなにちよヲ、ませのやえきく、つたかづら
- ⑱ たけにすゞめや、はなにちよう、ませの八重きく、つたかづら
- ① 《いろおん》きりに《ほうわう》《色引》しし《上ふし》にぼたんあふぎながし《ふし》すなながし
- ② 《いろおん》きりにほうわう《いろ上引》ししに《ふし》ぼたんあふぎながし《ふし》すなながし
- ③ きりにほうわう《上》し、にぼたん。あふぎながしすなながし。
- ④ きりにほうわうし、にぼたん。あふぎながし砂ながし。
- ⑤ きりにほうわう。し、にぼたんあふぎながしすなながし。
- ⑥ 桐に鳳凰、獅子に牡丹、扇流砂流し、

- ⑦きりにほうう王、し、にぼたん、あふきながし、すなかし、
- ⑧きりにほうわうし、にぼたんあふきながしすな、かし
- ⑨きりにほうわうし、にぼたんあふきながしすな、かし
- ⑩きりにほうわうし、にぼたん《イヤア》《下キンツメ》あふきながしすな、がし。《イヤア》
- ⑪桐に風風し、にぼたん。扇子なかしすな、かし。
- ⑫《イロコトハ》桐にほうわうし、に《アタル》ぼたん。《サイツメ》あふきながしすな、がし。
- ⑬《色詞》桐にほうをう獅子に《アタル》牡丹。《サイツメ》扇流しすな、がし。
- ⑭《イロコトハ》桐にほうわうし、にぼたん、あふきながしすな、かし。
- ⑮《イロ詞》桐にほうわうし、にぼ《アタル》たん。《サイツメ》あふきながしすな、がし。
- ⑯《色コトハ》きりにほうわうし、にぼ《アタル》たん。《ヤ》《サイツメ》扇ながし砂ながし。
- ⑰きりにほーをー ししにぼたん おおきながし すなながし。
- ⑱きりにほうおう ししにぼたん おおきながし すなながし
- ①《ふし》むしつくしくさづくしこもんからくさちらしもんあさきかのこひわかのこ
- ②むしづくしくさづくしこもんからくさちらしもんあさきかのこひわかのこ
- ③むしづくしくさづくし。こもんがらくさちらしもん。あさきかのこひわかのこ。
- ④むしづくしくさづくし。こもんからくさちらしもん。あさきかのこひわかのこ。
- ⑤むしづくし。くさづくし。小紋から草ちらしもん。あさきかのこひわかのこ。
- ⑥虫尽し、草尽し、小紋唐草散し紋、浅黄鹿の子、鶺鴒の子、
- ⑦虫づくし、くさづくし、こもん、からくさ、ちらしもん、あさきかのこ、ひわかのこ、
- ⑧虫づくし草づくしこもんからくさちらしもんあさきかのこひわかのこ
- ⑨虫づくしくさづくしこもんからくさちらしもんあさきかのこひわかのこ
- ⑩虫《ノル》つくし草づくし。《イヤ》こもんから草ちらし紋。浅きかのこにひわかのこ。
- ⑪むしつくし草づくし。小もんから草ちらしもん。浅黄かのこにひわ鹿子。
- ⑫虫づくし《カワツテ》草づくし。小もんから草ちらしもん。浅きかのこにひわかのこ。
- ⑬虫尽し《カハツテ》草づくし。小もん唐草散し紋。浅きかのこにひわがの子。
- ⑭虫づくし《カハツテ》草づくし。小もんから草ちらしもん。浅きかのこにひわがのこ。
- ⑮虫づくし《カワツテ》草づくし。小もんから草ちらしもん。あさきかのこにひわがのこ。
- ⑯むしづくし くさづくし 小もんからくさ ちらしもん あさきかのこにひわがのこ
- ⑰むしづくし くさづくし 小もんからくさ ちらしもん あさきかのこにひわがのこ
- ⑱むしづくし くさづくし 小もんからくさ ちらしもん あさきかのこにひわがのこ

- ①むらさきかのこに皆人の《色》心は《上ふし》けしのべにかのこも候と
- ②むらさきかのこにみな《いろ》人のこ、ろはけしのべにかのこも候と
- ③むらさきかのこに皆人の。《かんとめ》心はけしのべにかのこも候と。
- ④むらさきかのこに《ナラス》みな人の。こ、ろはけしのべにかのこも候と。
- ⑤むらさきかのこに皆人の。《かんとめ》心はけしのべにかのこも候と。
- ⑥紫鹿の子に、皆人の心はけふの紅粉かのこ、
- ⑦むらさきかのこに、見る人の心は、けしのへにかのこも候と、
- ⑧紫かのこにみる人の心はけしのへにかのこくちばかのこも候と
- ⑨紫かのこに見る人の心はけしのへにかのこくちばかのこも候と
- ⑩むらさきかのこに見る人の心は。《ナス》けしのべにかのこくちばかのこも候と。
- ⑪むらさきかのこみる人の心はけしのへにかのこ。朽葉かのこも候と。
- ⑫《イロノリ》紫かの《アヒ》こにみる人の《アタリ》こ、ろ《ヒロイ》はけしのべにかのこ。くちばかのこも候と。
- ⑬《イロノリ》紫かの《アヒ》こを見る人の《ヒロイ》心はけしのべにかのこ。朽葉かのこも候と。
- ⑭《イロノリ》紫かの《アヒ》こにみる人の《アタリ》心は《ヒロイ》けしのべにかのこ。くちばかのこも候と。
- ⑮《イロノリ》むらさきかのこに《アヒ》みる人の《アタリ》心は《ヒロイ》けしのべにかのこ。くちばかのこも候と。
- ⑯《色ノリ》むら《合》さきかのこにみな人のこ、《アタリ》ろは《ヒロイ》けしのべにかのこ。くちばかのこも候と。
- ⑰むらさきかのこをみるひとの ころわ けしのべにかのこ くちばかのこもそヲろオト
- ⑱むらさきかのこに はなひこの ころはけしのべにかのこ くちばかのこもそふろふと
- ①べんぜつはたらうたりことばに花をさかせつ、
- ②べんぜつはたらふたりことばにはなをさかせ
- ③べんぜつはたらふたり。ことばに花をさかせつ、。
- ④べんぜつはたらふたり。ことばに花をさかせつ、
- ⑤べんぜつはたらふたり。ことばに花をさかせつ、
- ⑥言葉に華を咲せつ、
- ⑦へんぜつはたらうたり、言葉に花をさかせ、
- ⑧へんぜつはたらふたりことばに花をさかせ
- ⑨へんぜつはたらうたりことばに花をさかせつ、
- ⑩べんぜつはたらうたり。言葉に花をさかせつ、
- ⑪弁舌はたらふたりことばに花を咲せつ、
- ⑫《エイかん》べん《地カ、リ》ぜつはたらふたりことばにはなを《アタル》さつかせつ、
- ⑬べん《地カ、リ》ぜつはたらふたり詞にはなを《アタル》さつかせつ、

- ⑭ 《ゑのかん》《地カ、リ》へんぜつはたらうたりことばにはなを《アタル》さつかせつ、。
- ⑮ 《エヒカン》《地ガ、リ》へんせつはたらふたりことばに花を《アタル》さつかせつ、。
- ⑯ 《エイカン》《地カ、リ》べんぜつはたらふたりことばに花を《アタル》さつかせつ、。
- ⑰ べんぜ(ツ) たたらうたりと ことばにはなを さつかせつつ
- ⑱ べんぜつ たらうたり ことばにはなをや さかせつつ
- ① 一時ばかり語りしは《はつみ》げにおもしろふぞ《ふし》うりにける
- ② 一ときばかりかたりしは《はつみふし》げにおもしろふぞうりにける
- ③ 一時計《う》かたりしは《かんをとし》げにおもしろくぞ聞へける。
- ④ 《ナラス》一時ばかり《ウ》かたりしはげにけう。有《へり》。て。へみへにけり
- ⑤ 一時ばかりかたりしはげにけふ。ありてぞ見へにけり
- ⑥ 一時計り語りしは、げに面白ぞ聞へける
- ⑦ 一時計かたりしは、さてげにおもしろぞ聞えける
- ⑧ 一時計かたりしはげにおもしろふぞ聞へける
- ⑨ 一時計かたりしはさてげにおもしろふぞ聞えける
- ⑩ 《上カ、ル》一時計にかたりしはさて《イツヤ》げにおもしろふぞ聞えける
- ⑪ 半時はかり語りしはげに面白ぞ聞へける
- ⑫ 《ノリ》はん《ハコビ》ときばかりかたりしはげにおもしろうこそ聞えけれ
- ⑬ 《ノリ》半《ハコビ》ときばかりかたりしはげにおもしろふぞきこへける
- ⑭ 《ノリ》ひ《ハコビ》ときばかりかたりしは扱げにおもしろふこそ聞えけれ
- ⑮ 《ノリハコビ》半ときばかりかたりしはさてげにおもしろふぞきこへけれ
- ⑯ ひとときばかり語りしは扱げにおもしろふぞきこへけれ
- ⑰ はんときばかりかたりしわ げにおもしろおぞきこえける
- ⑱ はんときばかりかたりしは おもしろかりけるしだいなり